

食とくらしの「今」が見えるWebマガジン

2025 APRIL

4

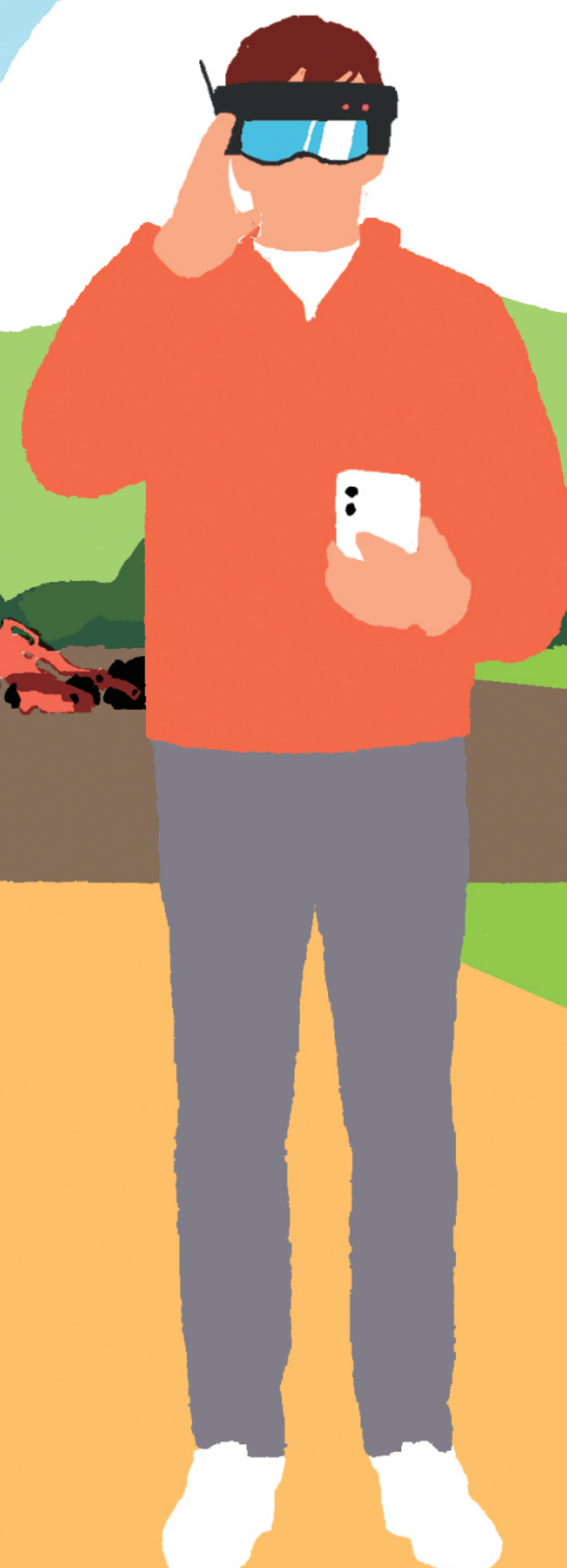
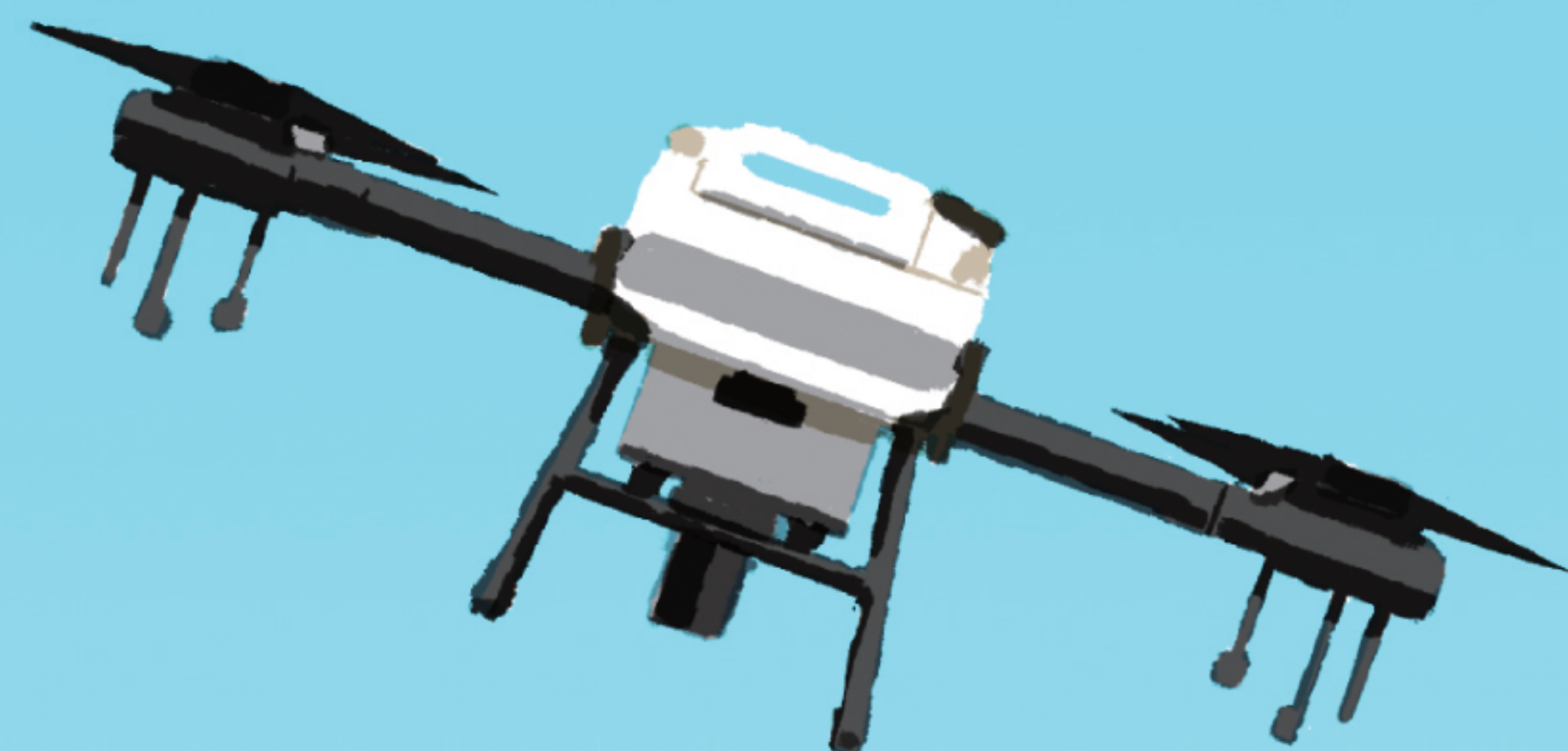
aFF

あふ

Agriculture Forestry Fisheries

特集

スマート農業



農林水産省

特集

スマート農業

1



そこが知りたい

“スマート農業”



スマート農業とは、ロボットやAIなどの先端技術を使って、
農業の作業効率化や品質向上を目指す取り組みのこと。
狭い田畑が多い日本に合った技術の開発が進んでいます。

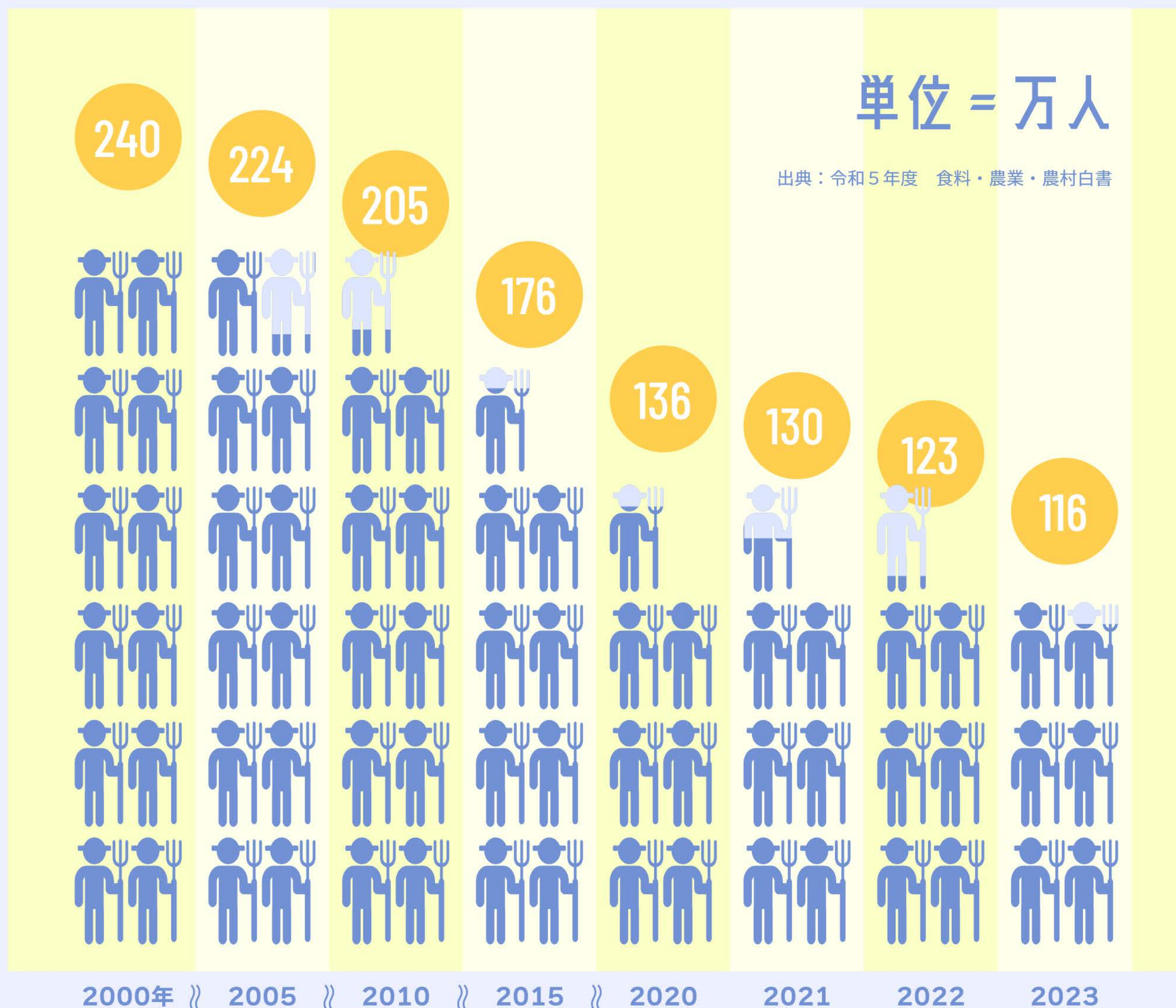
／ 農業者の減少と高齢化が課題 ／

農業をめぐる現状

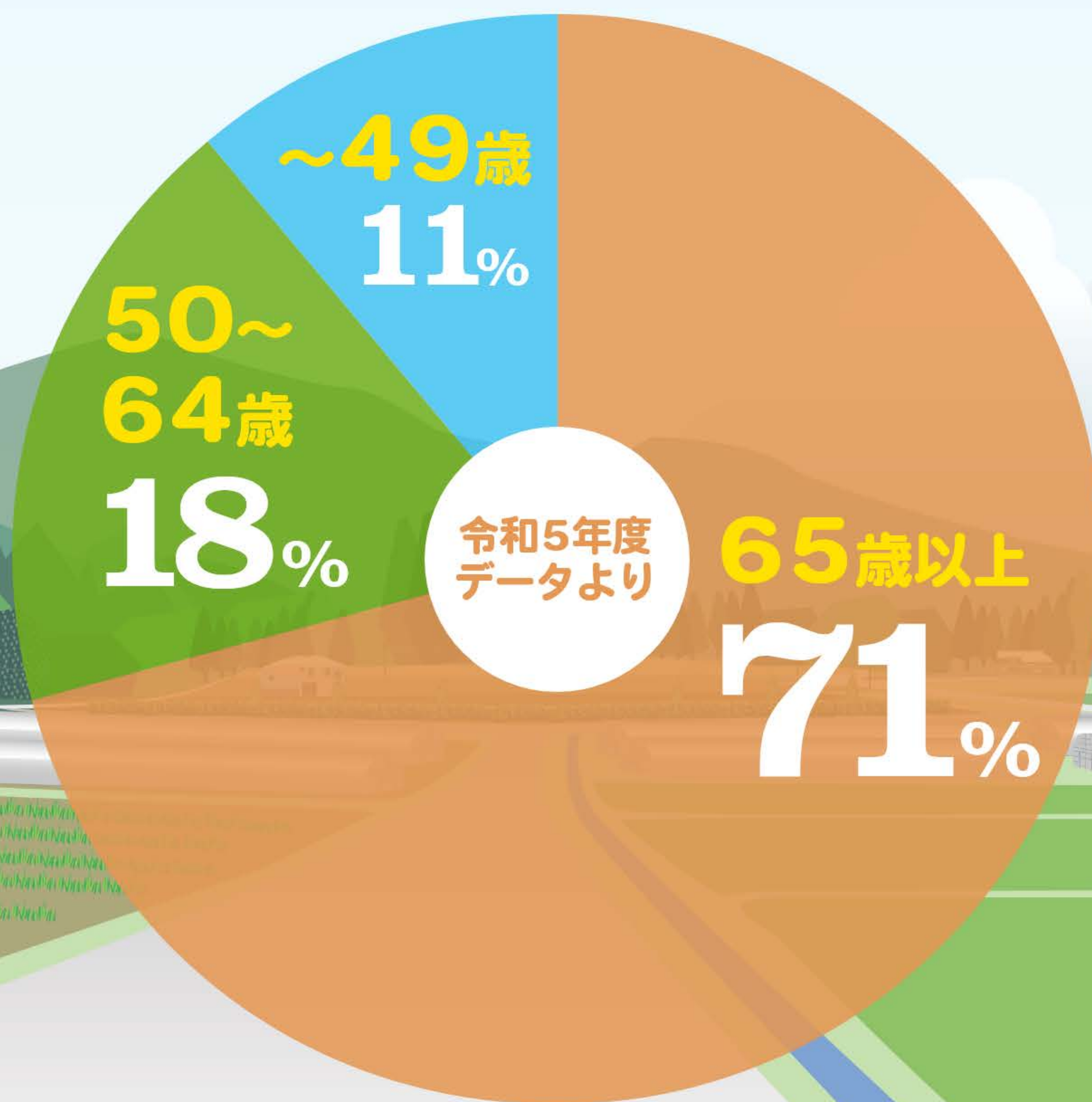
基幹的農業従事者数は2000年からの23年間で、240万人から116万人におおむね半減しています。65歳以上の高齢者の割合も高く、高齢化も進んでいます。
労働力不足への対応としてスマート農業の導入が期待されています。

▶ 基幹的農業従事者数の推移

※「基幹的農業従事者」とは、15歳以上の世帯員のうち、ふだん仕事として主に自営農業に従事している者をいう



年齢別の基幹的農業従事者数



出典：令和5年度 食料・農業・農村白書

労働力不足への対応方法

スマート農業の導入・ICT化



46.4%

雇用者の待遇向上



33.7%

生産品目の見直し



31.9%

機械の大型化



30%

外国人労働力の活用



29.6%

出典：令和5年度 食料・農業・農村をめぐる情勢の変化（人口減少下における担い手の確保）



＼ これからの農業の決め手 ＼



スマート農業



現在すでに使用され、また、改良が進んでいる

「スマート農業」の技術のなかから3つをご紹介します！

他にも、野菜や果樹の収穫ロボットやロボット草刈機などの先端技術が開発中です。

01

ドローン

>> Drone

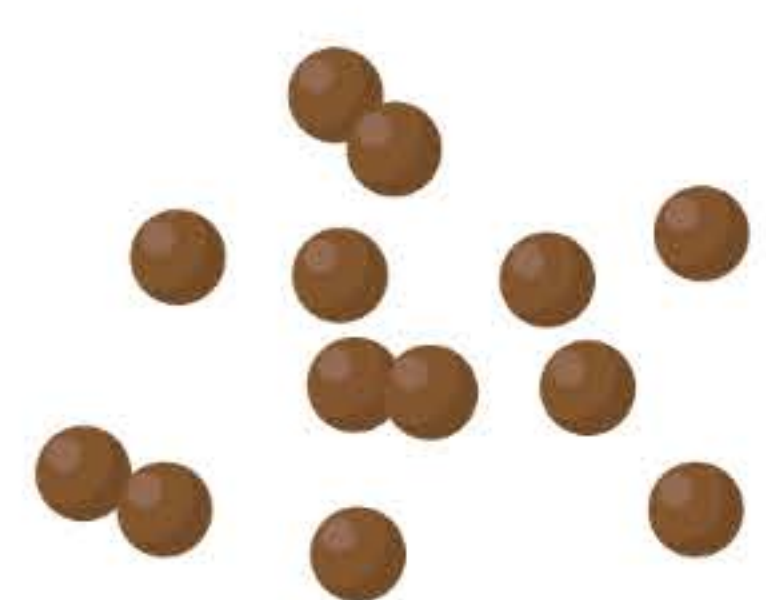
散布

従来の散布法に比べ、作業時間が大幅に削減されるとともに、身体負担も大幅に低減。生育情報を踏まえて散布量も減らせます。



鳥獣被害対策

赤外線カメラ搭載機でAI画像解析システムを使い、獣種や個体数、位置情報を自動解析。



播種 (種まき)

適量を正しい位置に播種し効率化。土壌の水分量に応じ播種量を自動で変える技術も開発中。

農産物など 運搬



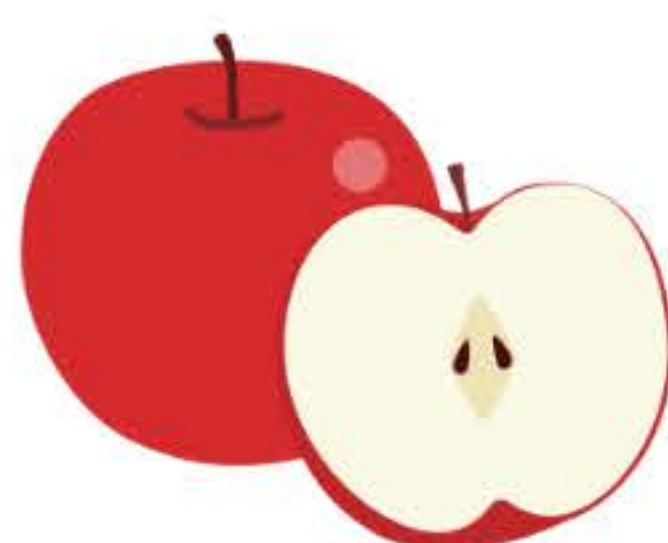
収穫物の集荷場への運搬作業の負担を軽減し時間を短縮。特に山間部や斜面での肉体的な負担やケガのリスクを低減。

情報収集・発信



消費者に生育情報などをリアルタイムで発信可能。

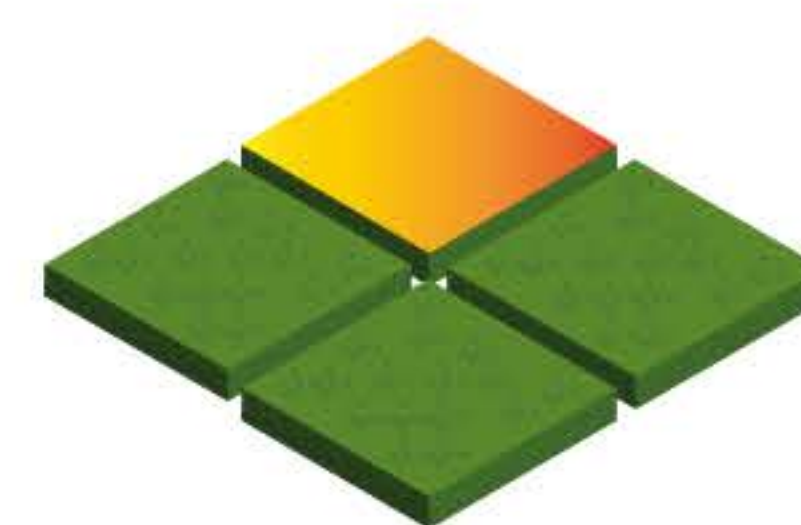
授粉



花粉の溶液を散布することにより、手作業で行っていた授粉作業の省力化・軽労化を実現。

ほ場センシング

作物生育状況や土壌の肥沃度、病害虫・雑草の発生状況を画像から分析し、農作業を効率化。



02

トラクター

>>Tractor

ロボットトラクター



- ▶ 無人では場内を自動走行（ハンドル操作、発進・停止、作業機制御を自動化）
- ▶ 使用者は、自動走行するトラクターをほ場内やほ場周辺から常時監視し、危険の判断、非常時の操作を実施
- ▶ 1人で2台を操作可能（有人－無人 協調システム）



- ▶ 有人－無人協調システムにより、作業時間の短縮や1人で複数の作業（例：無人機で耕耘・整地、有人機で施肥・播種）が可能
- ▶ 1人当たりの作業可能面積が拡大し、大規模化に貢献

概要

トラクター
(自動操舵機能付き)

- ▶ ハンドルを自動制御し、設定された経路を自動走行
- ▶ 自動での旋回が可能な製品も存在

導入の
メリット

- ▶ 自動で正確に作業できるため、大区画の長い直線操作などでも作業が楽になる
- ▶ 非熟練者であっても、熟練者と同等以上の精度、速度で作業が可能

03

スマートグラス

>> Smart glasses

初心者でも熟練者と同じ判断が可能

果実の成熟度をAIで判別し、収穫可能かどうかを判断



ひとりでも 作業が可能

農地に対する平行直線が表示されるので、正確な作業が可能に

コミュニケーションをとりながら作業が可能

作業者が装着したスマートグラスの映像を、遠隔地にいる熟練者が見ながらリアルタイムで枝の剪定や摘果を指導



普及のポイント

農場の多くが中小規模の日本。消費者の見た目や品質への期待値も高いため、欧米の大規模農場よりも細分化された繊細な技術が要求されます。農林水産省で日本の「スマート農業」を牽引する長谷川明宏調査官に、現状と今後の普及のポイントを聞きました。



農林水産省 | 農林水産技術会議事務局 | 研究推進課 | 調査官 長谷川明宏さん

1994年農林水産省入省。農政施策の企画立案などを担当。2019年度からスマート農業に関わり、生産現場、研究機関、スタートアップなどの企業と連携し、社会実装を推進中。



✔ ポイント ▶▶ 1

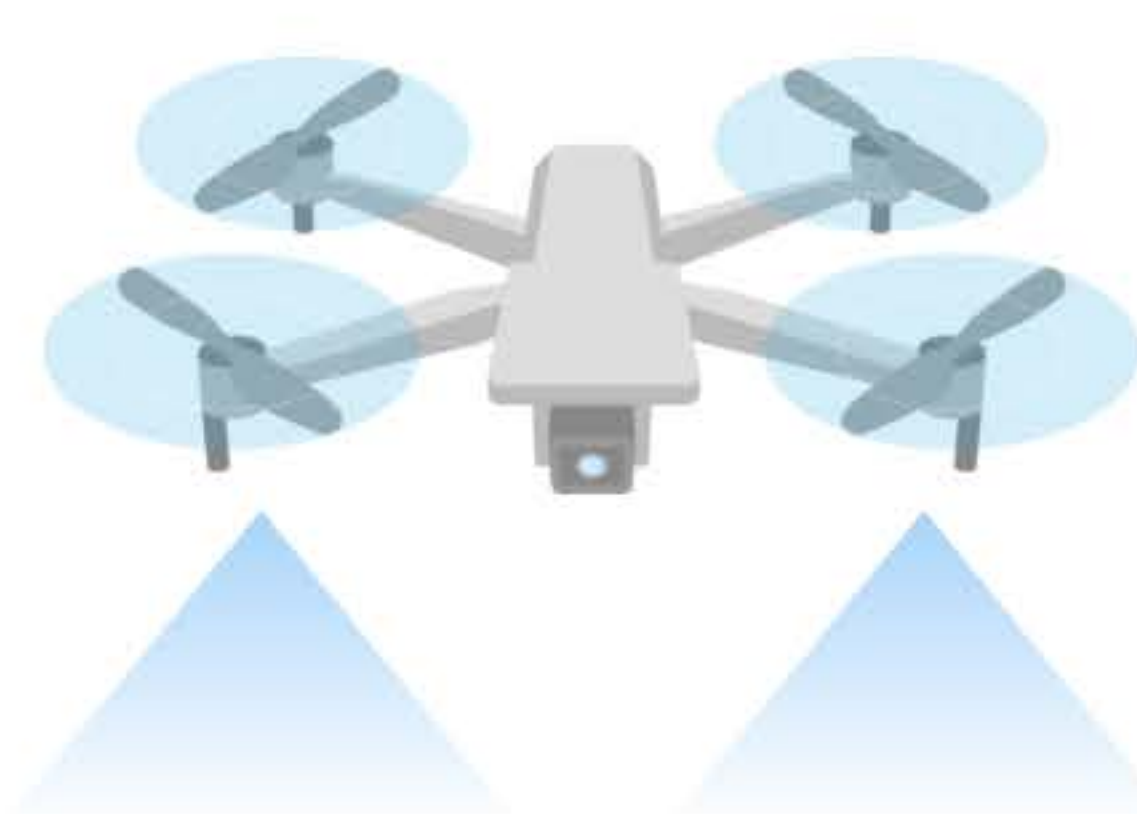
メリットを知る

生産者それぞれの課題に対応する技術にどんなものがあるのか、農業経営にどう役立つかを知る。

✔ ポイント ▶▶ 2

効率的な技術導入

生産方法の合理化や燃料代などのコスト削減効果と、導入コストとのバランスを取り、効果を最大に。



✔ ポイント ▶▶ 3

農作業のサービス化

スマート農業機器を保有し、生産工程の一部を請け負うなどのサービス事業体を育成。

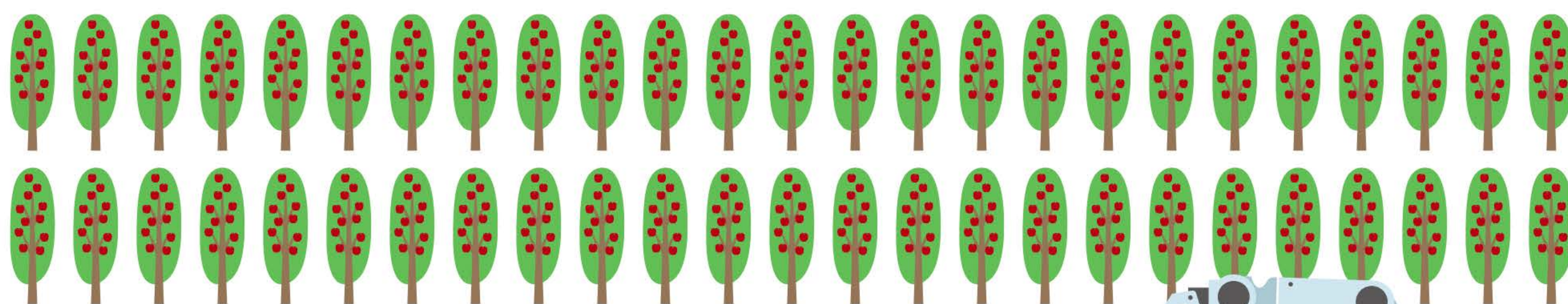
✔ ポイント ▶▶ 4

今後のさらなる開発

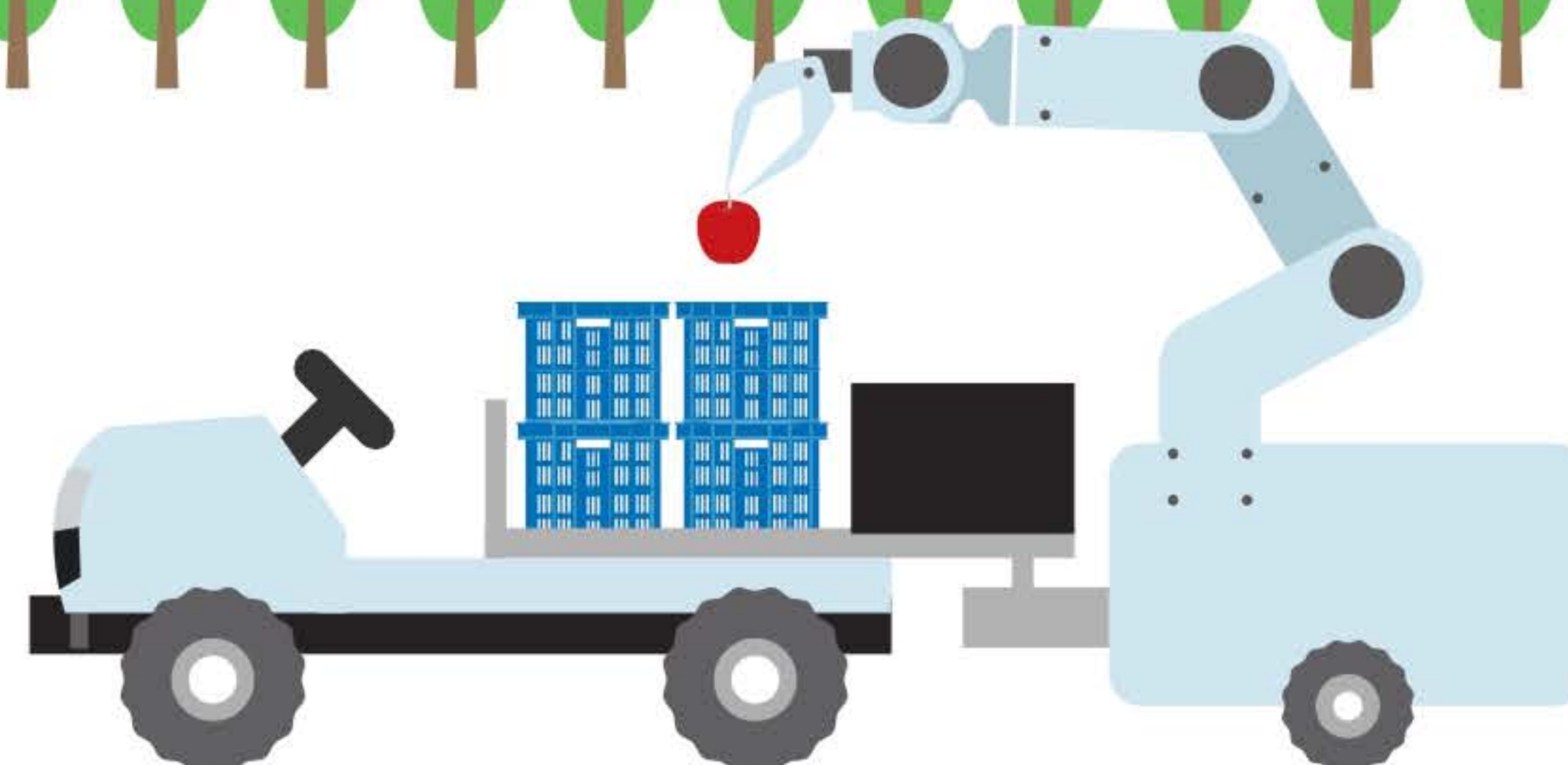
ニーズがあっても、まだ開発途中のスマート農業機器も。今後の展開に注目！



スマート農業を後押しする法律ができました



スマート農業技術に適した 生産方式への展開【目指す姿】



「スマート農業技術活用促進法」が2024年6月に成立し、10月1日に施行されました。この法律は、農業者の減少など、農業を取り巻く環境の変化に対応し、生産性の向上を図るためのもの。認定を受けた農業者や事業者は、金融などの支援措置を受けることができるようになり、スマート農業が導入しやすくなります。

RELAY THE FOOD

～未来につなぐ食と風土～

6月8日（日）～6月15日（日）の期間中、農林水産省は、大阪・関西万博のメッセ会場にて展示を行います。コンセプトは、「農林水産業と食文化の発展は世界をもっと豊かにつなぐ」。日本の食・農林水産業に関する伝統、多様性、未来に向けた取り組みについて、国内外に向けて発信します。



2025. 6/8 日 - 15 日
（「食と暮らしの未来ウィーク」期間中）

会場 大阪・関西万博会場内
EXPO メッセ
「WASSE」 イベントホール南側

来場予約
不要

今週のまとめ

人手不足と高齢化が年々加速している日本の農業。

作業の効率化、身体負担の低減、生産性の向上が期待される「スマート農業」技術が

新たな農業の担い手の増加につながります。



特集

スマート農業

2



密着！

スマート農業でどう変わる



2019年に始まった「スマート農業実証プロジェクト」で幕を開けた日本のスマート農業。導入する生産者が全国に広がっていますが、なかでもいち早く導入し、実績を上げている愛知県のハウス栽培生産者と岡山県の露地栽培生産者に話を聞きました。



元エンジニアが



スマート農業 をけん引

企業に勤めるエンジニアから生産者に転身したきゅうり農家の下村堅二さん。
その経験と知識が、栽培はもちろん、集荷場のスマート化でも大いに役立っています。
地元の生産者の結束にもつながり、日本のハウス栽培のスマート化をけん引する存在に。



JA西三河きゅうり部会 下村堅二さん

メーカーで生産技術エンジニアとして勤務後、33歳で就農。施設きゅうり栽培のスマート化や集荷場の選果機の企画設計を手掛け、JA西三河きゅうり部会の運営もサポートする。

ハウス内の環境を リアルタイムで把握

「あぐりログ」がハウス内の環境を24時間モニタリング。地上部では温度、湿度、二酸化炭素濃度を、根域では土壌温度、土壌水分率、水溶性塩類量などを計測し、栽培に最適なプログラムにつなげます。



取得したデータを活用し 自動的に環境を制御

統合環境制御装置「プロファーム」でさまざまなデータを取得し、かん水や温度調節などの自動化を実現。作物の育成に最適な環境を自動的に保つことができます。

スマートフォンが大活躍 生産者間のデータ共有も

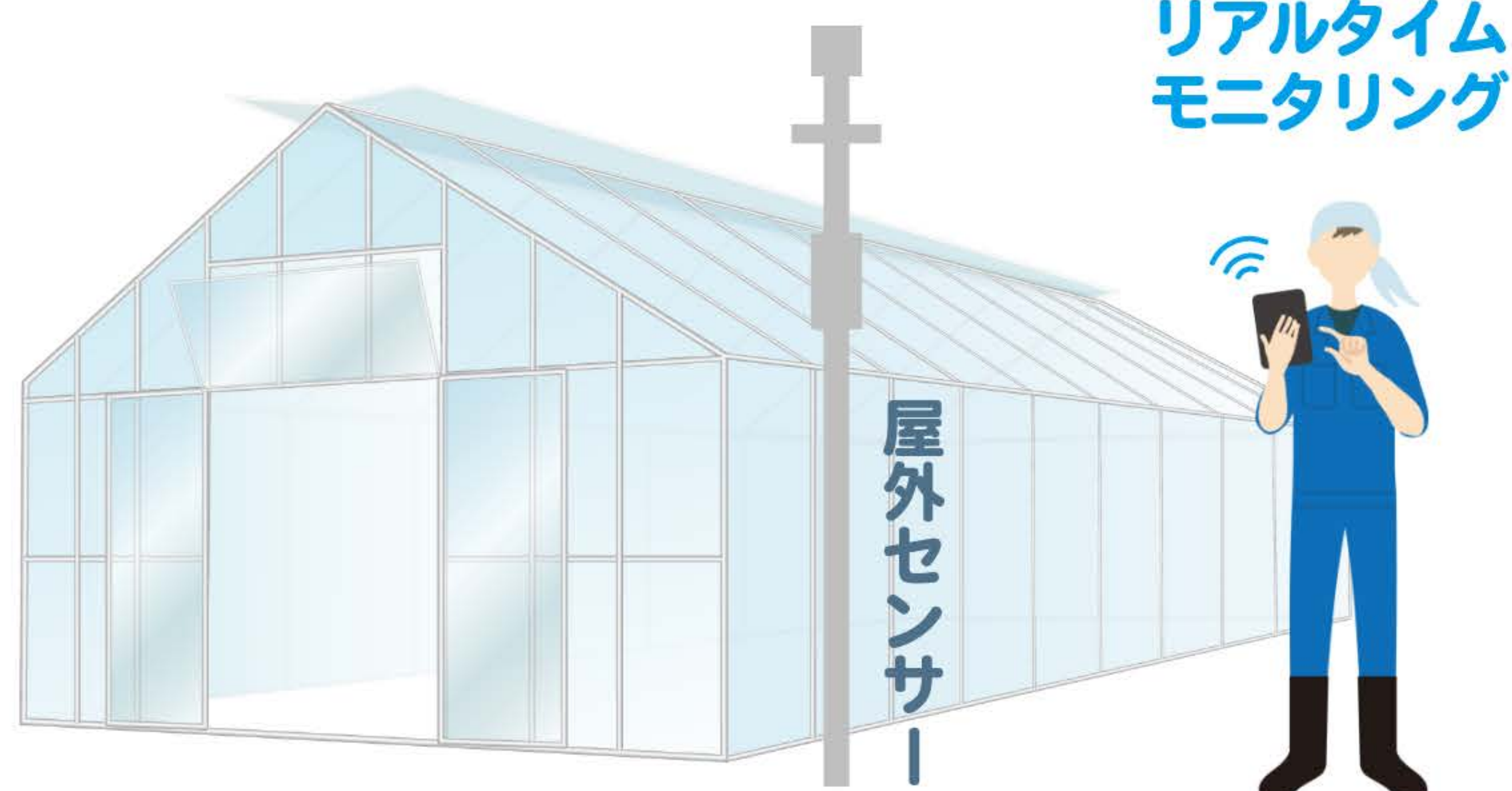
地元の生産者グループで「あぐりログ」のモニタリングデータを共有。労務管理ツール「agri-board」で労務データ分析を行い、適切な人員配置が可能に。従業員の作業管理や勤務内容の指示にも活躍しています。



モニタリング&情報共有



屋外センサーとハウス内センサーの両方で環境をモニタリング。暖房機や遮光カーテン、かん水などが自動で調整され、あらかじめ設定した最適な状態に保たれます。



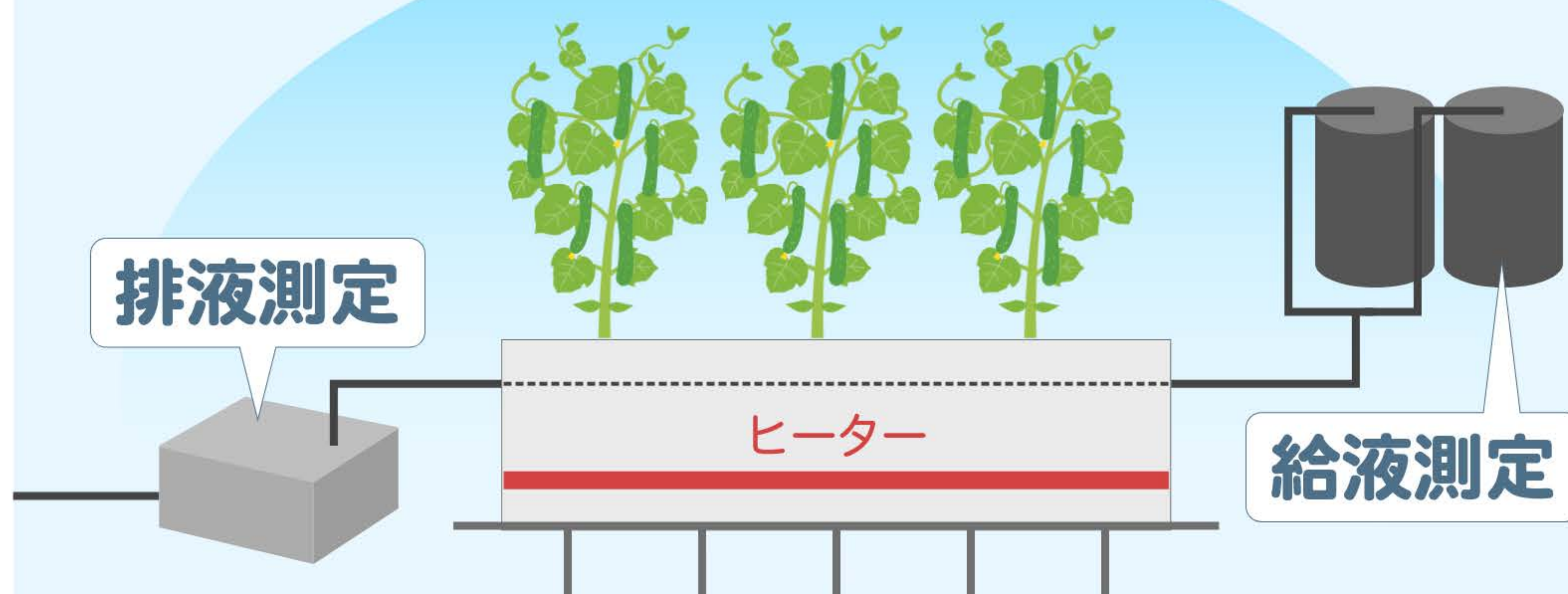
ハウス内部

環境モニタリング

温度 湿度 CO₂ 日射量
培地温 培地水分量 培地EC

養液モニタ装置

流量・ECセンサー



労働時間



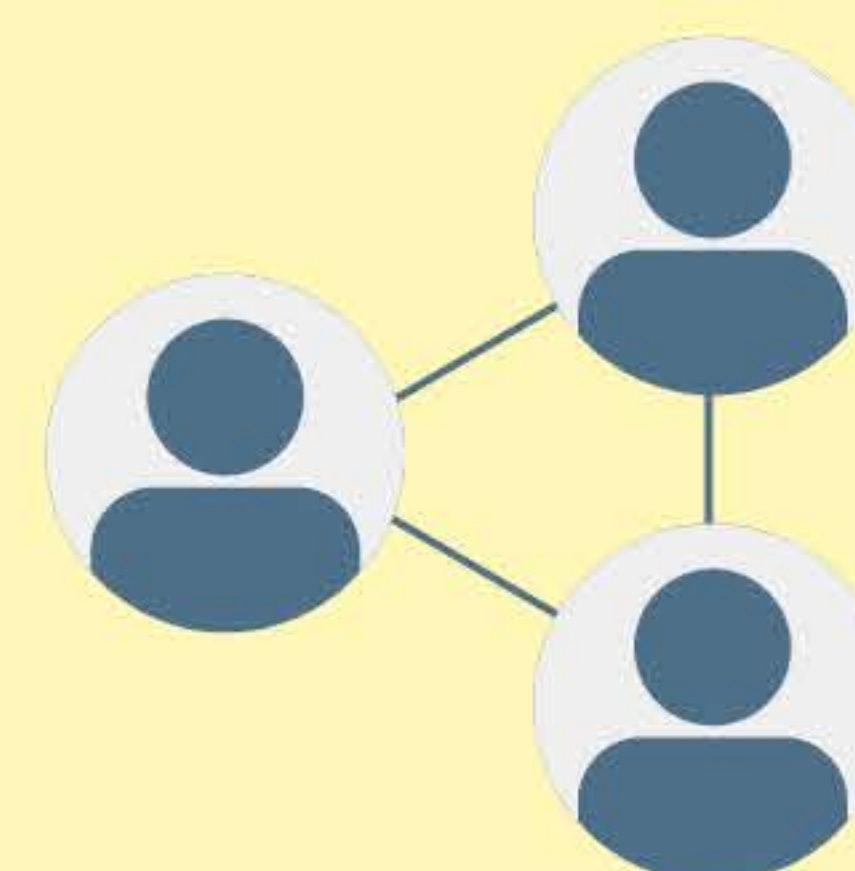
10%DOWN

収穫量



40%UP

情報共有



スマート農業の好循環

JA西三河が取り組むスマート農業は、栽培分野だけに限らず、生産者から消費者に農産物を届ける各分野でのスマート化が成果を上げています。



01 スマート農業技術

モニタリングデータを活用して栽培に最適な環境を設定。かん水量や温度、二酸化炭素量などを自動でコントロールし、収穫量予測に従って労働力の効率化と合理的な管理が可能に。農場間でデータを共有し、産地全体をレベルアップ。

02 販売のスマート化

生産者からアップされるデータや天気予報などをベースにした出荷予測モデルをもとに、2週間先までの産地全体の出荷量を予測。生産状況にあわせた安定した販売につなげます。



03 物流のスマート化

積み込み時刻や積荷量が直前まで確定せず、非効率になりがちな青果物流。出荷予測情報を事前に共有することで産地と物流が連携し、物流の効率化などを目指します。

04 袋詰め販売のスマート化

産地での自動袋詰めに加えて、生産者情報などのトレーサビリティをはじめ、産地から発信する農家レシピやキャラクターのSNS情報などのラベルを自動作成し、高付加価値化。



農業の生産者は、アスリートのコーチのような存在。現在のスポーツ界では、より効率的に高い成績を上げるためのデータ活用が欠かせませんよね。農業も同じで、より多くの品質の高い作物を、良い状態で安定的にお届けするために、スマート農業を活用しています。



加工・業務用野菜に特化して



一貫体制を構築



気候の影響を大きく受ける露地栽培で、輸入比率の高いキャベツ、たまねぎ、かぼちゃを栽培する農業生産法人の（有）エーアンドエス。2020年から「スマート農業実証プロジェクト」に参加し、加工・業務用野菜に特化した、スマート農業一貫体制の構築に取り組んでいます。



農業生産法人（有）エーアンドエス | 社長 **大平貴之さん**

育種ブリーダーとして勤務後、2003年に2ヘクタールの農地でエーアンドエスを立ち上げる。加工用野菜に特化して大規模&スマート化を推進し、現在は農地を20倍以上に拡大。

腰を曲げずに 重たいキャベツを収穫

腰を曲げて一つずつ収穫し、重いキャベツを運搬するという困難が伴っていたキャベツの収穫作業。自動収穫機の導入により、作業者はコンテナ台に乗ったまま、スピーディな一斉収穫が実現しました。



自動かん水システムで 育苗が飛躍的に合理化

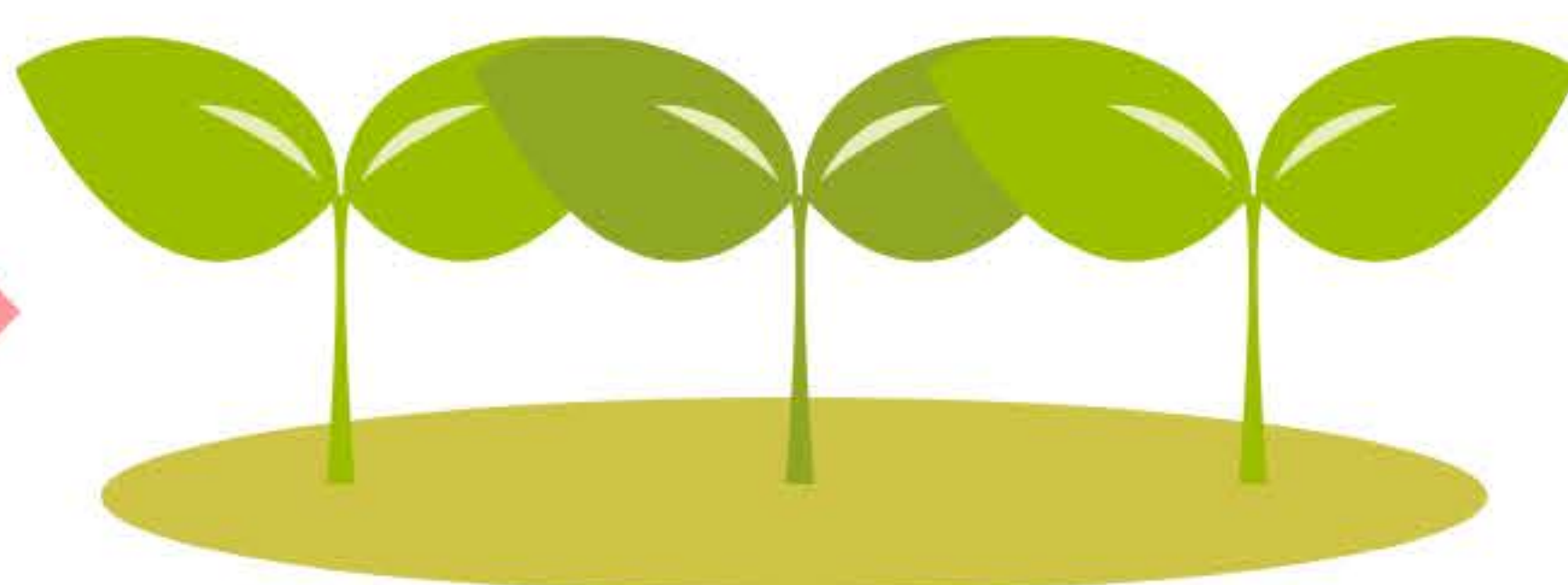
水分センサーの値をフィードバックし、目標含水率を下回ると自動的にかん水するシステムを導入。これにより育苗作業の手間が飛躍的に合理化。自動収穫機に必要な作物の品質均一化にも役立ちます。

ICT活用による持続可能な農業

不揃い



揃っている



育苗自動化による管理時間低下

6時間／日 ▶ 2.5時間／日

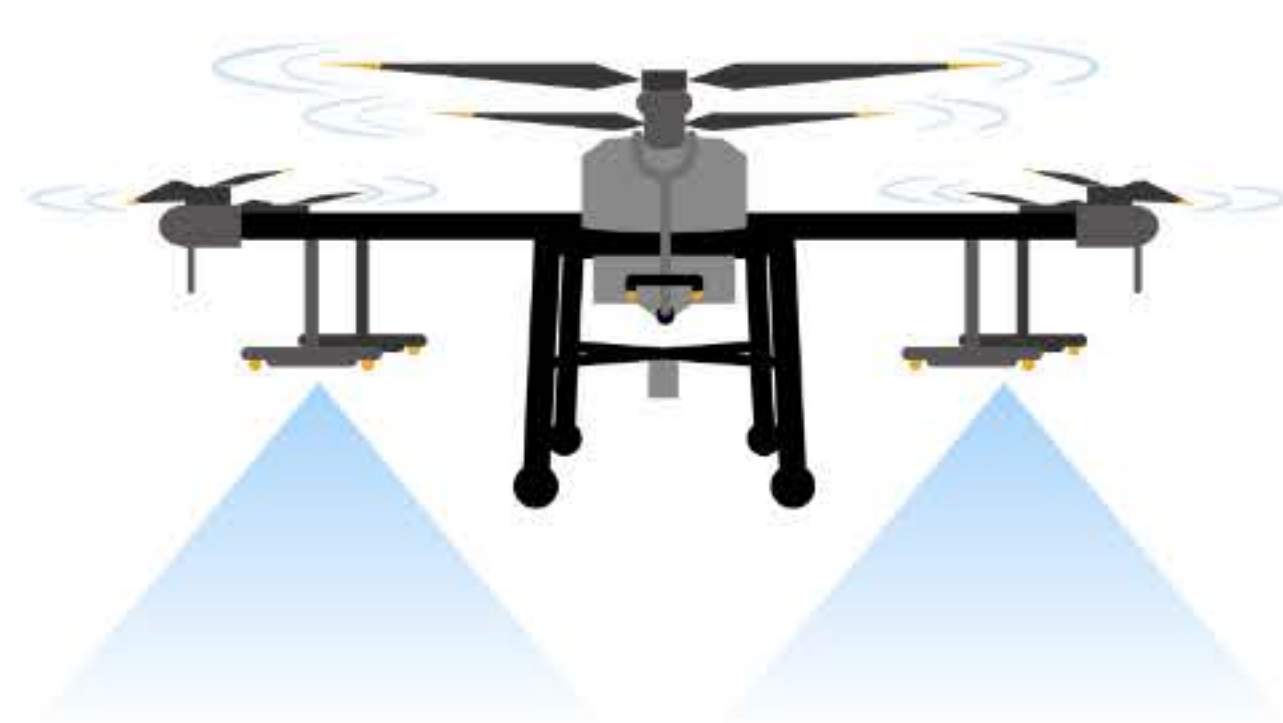
ロボットトラクターによる
投下労働時間

−30.8%



ドローンによる
投下労働時間

−50.3%



農業労働のサステナブル化



女性、パート、高齢者、障がい者が働きやすく

スマート化により
大きく揃った玉に



国産野菜シェアUP

輸入率が高く、重くて作業が大変な野菜を中心に、加工用や業務用に特化して、大規模化、スマート化を視野に入れた農業を始めました。子どもの頃から腰が曲がった農家のおばあさんを見てきたので、スマート化により、誰でも長く働ける環境を整えたいと思っています。



国産野菜シェア奪還プロジェクト



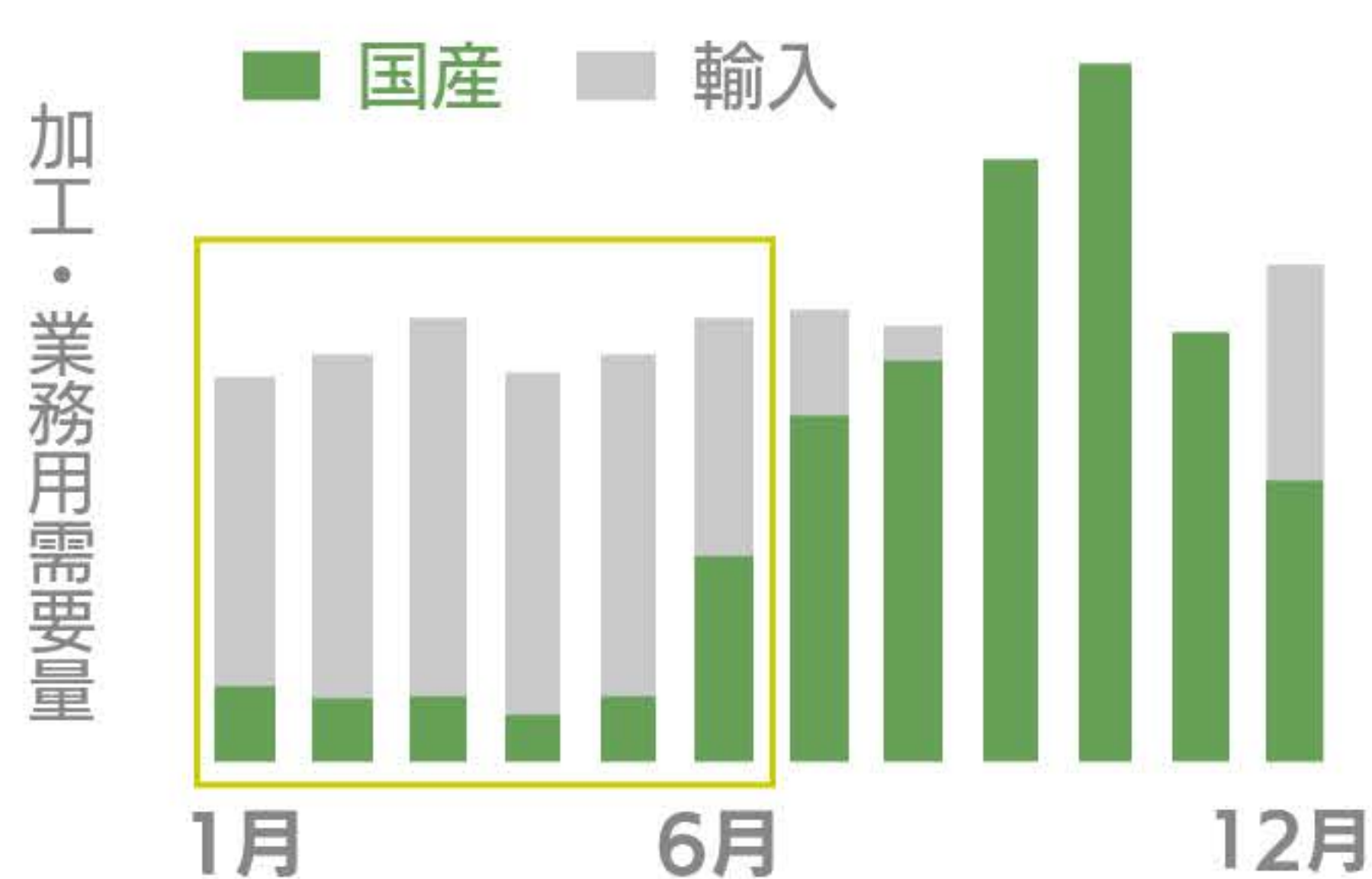
現状

国産野菜にチェンジ

将来

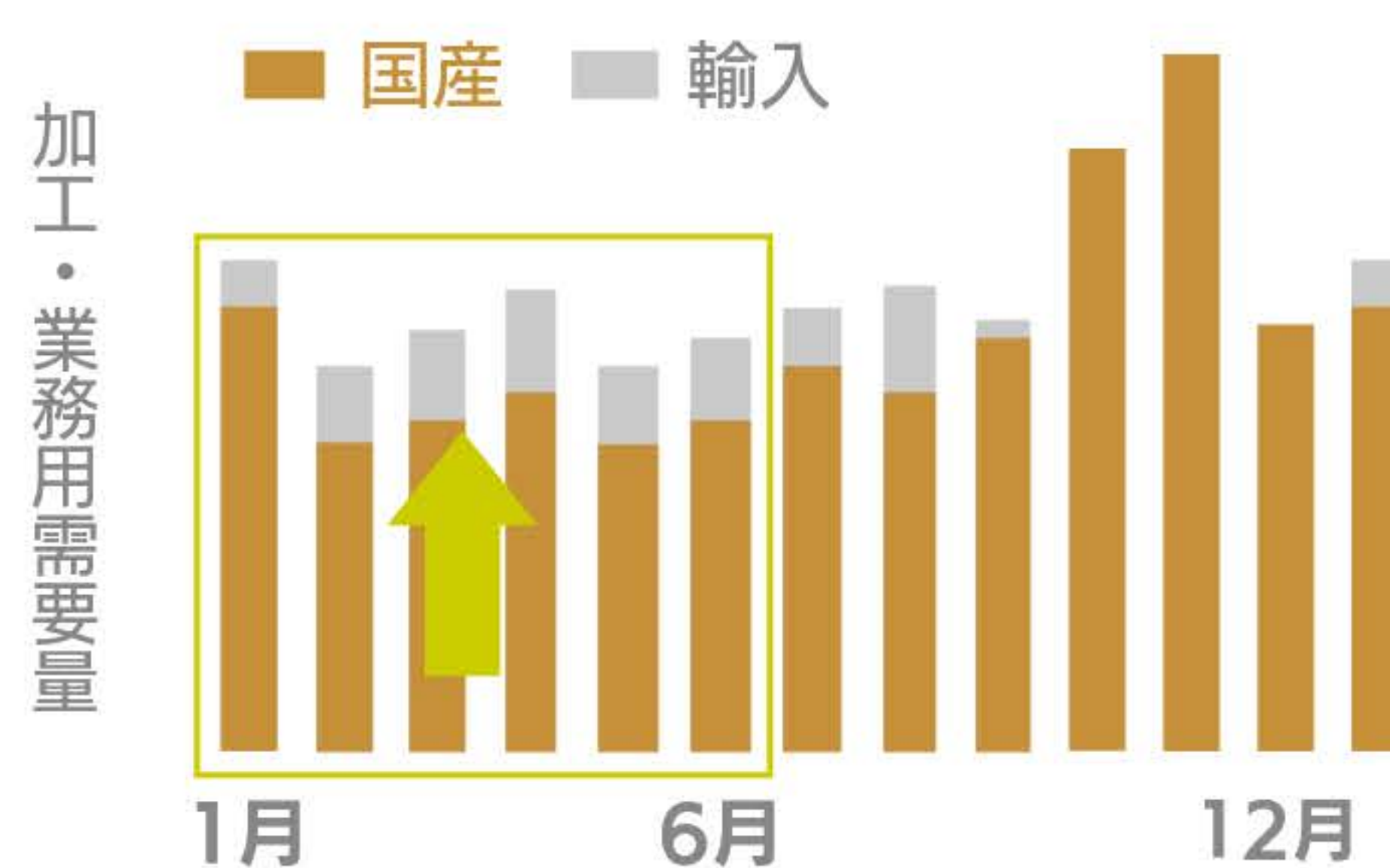
輸入に依存

国産が品薄になる時期に外国産が多く輸入されているため、周年安定供給体制の構築が必要。



国産に転換

産地の多様化、冷凍などの保存技術の活用などにより周年安定供給体制を実現。



日本で消費される野菜は、約6割が加工・業務用。そのうち約3割が輸入に占められています。海外調達の不安定化によるリスク軽減のため、農林水産省では、加工・業務用を中心とした国産野菜の生産と活用の拡大を図る「国産野菜シェア奪還プロジェクト」を実施。生産・供給の事業者を結ぶサプライチェーンを構築します。

今週のまとめ

スマート農業は生産者の労働効率化や作物の品質向上だけでなく

物流を含めた産地と消費者の好循環を生み出します。

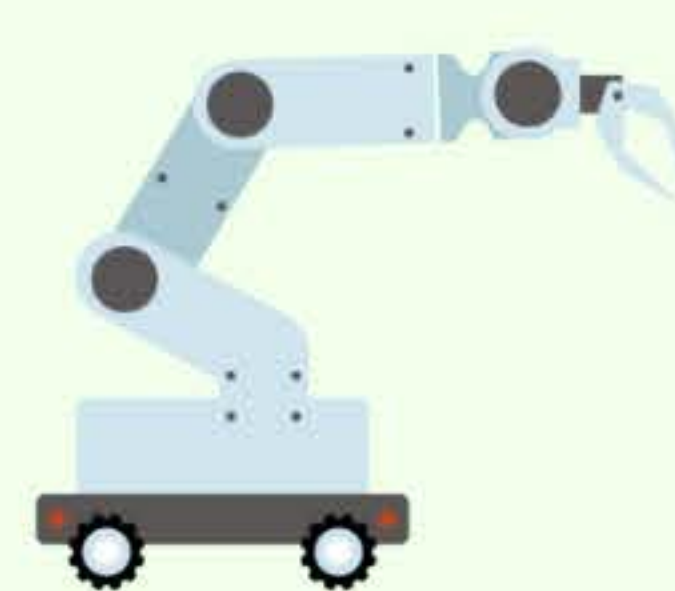
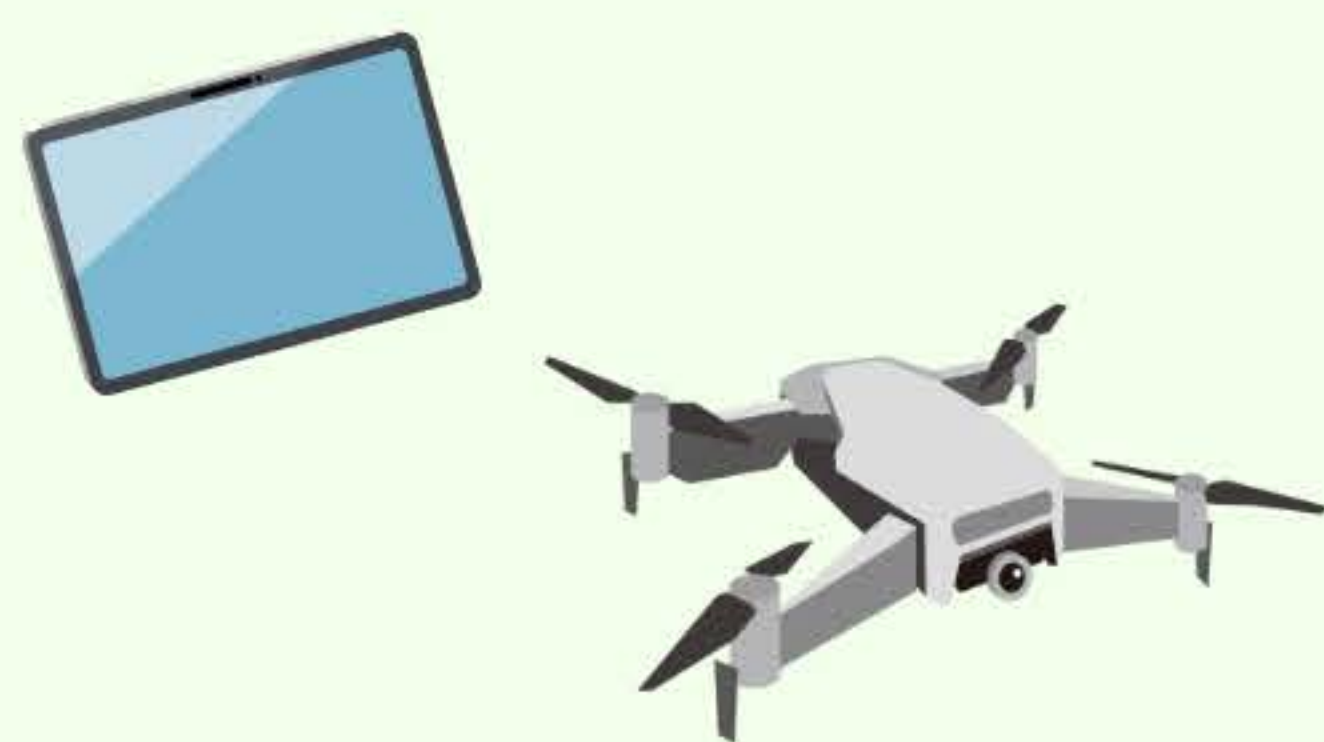
また、どんな人でも長く働けるサステナビリティを確保します。



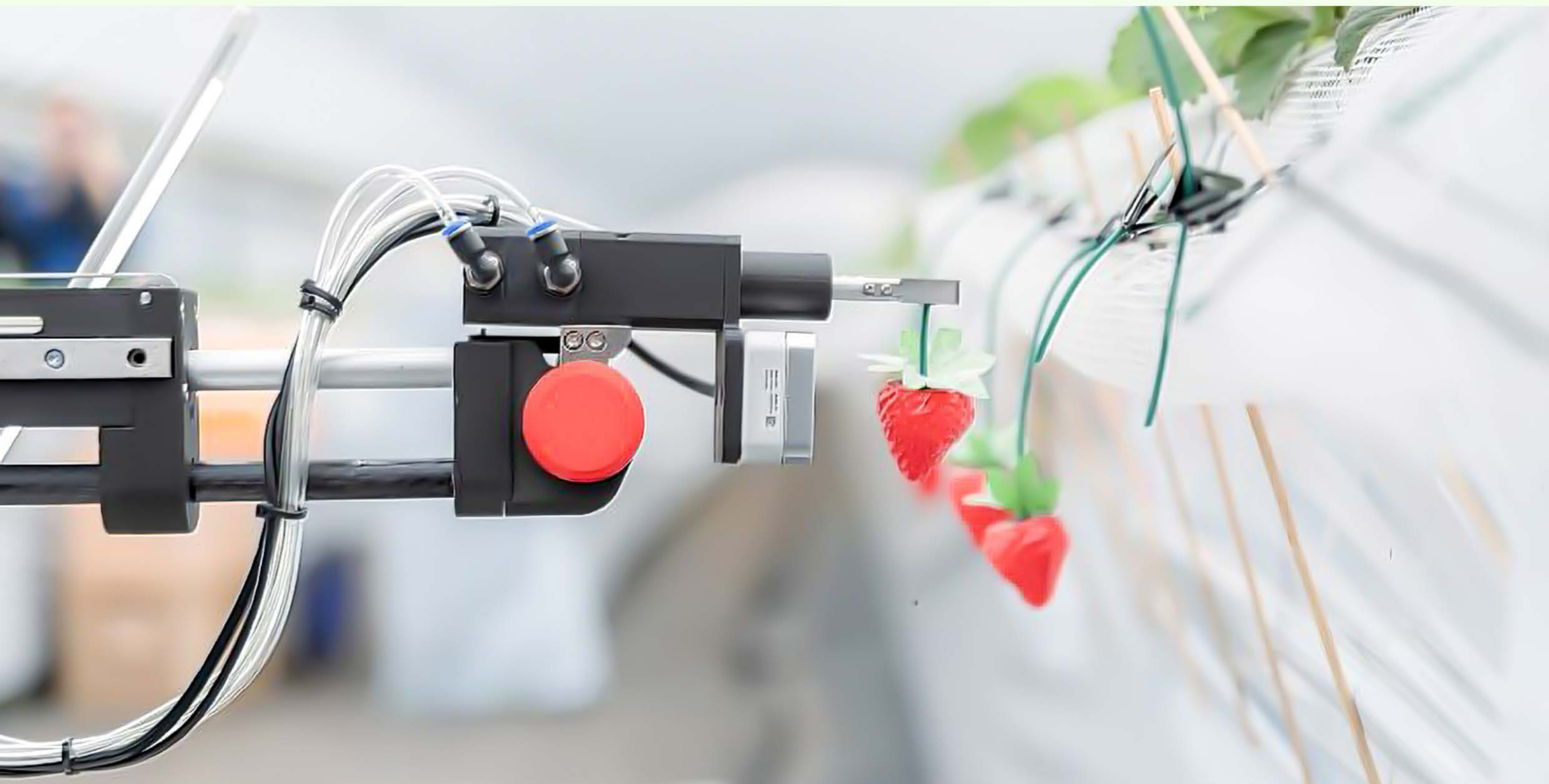
特集

スマート農業

3



農業の未来を担う 研究開発



農作業の省力化・高度化を実現するスマート農業技術の開発・普及が進み、
すでに定着した技術もあれば、これから広がっていく技術もあります。
最先端の技術が使われている現場を訪ね、どんな未来を描くのかをご紹介します。



ARを活用した



画期的な 農業アプリ

現実世界にデジタル情報を重ね合わせて表示する技術、AR（拡張現実）を活用し、スマートフォンやスマートグラスを使って、農作業をサポートするアプリ「Agri-AR」。最先端のデジタル技術が農業でどう活用されているのか、開発者に話を聞きました。



（株）Root 代表取締役 **岸圭介さん**

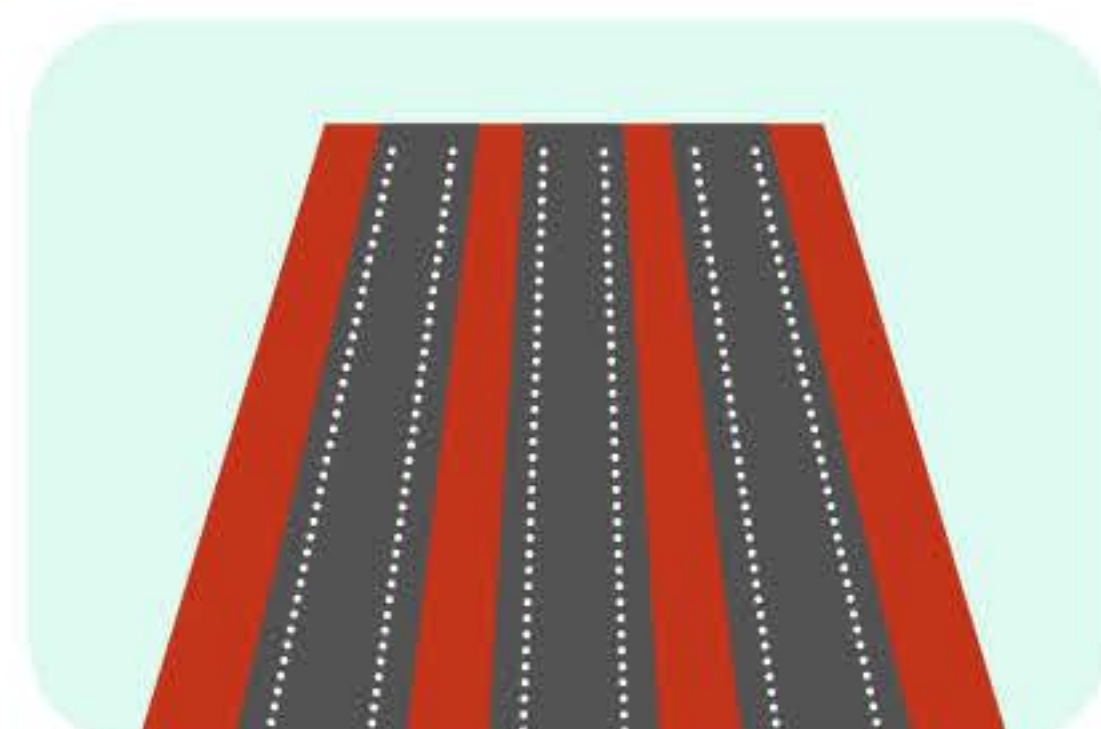
東京大学卒業後、（株）新日本製鉄入社。英オックスフォード大学のMBAを修了し、（株）Rootを創業。その間に北海道と茨城県で就農を経験。単独で開発した「Agri-AR」で数々の賞を受賞。

Agri-ARができること



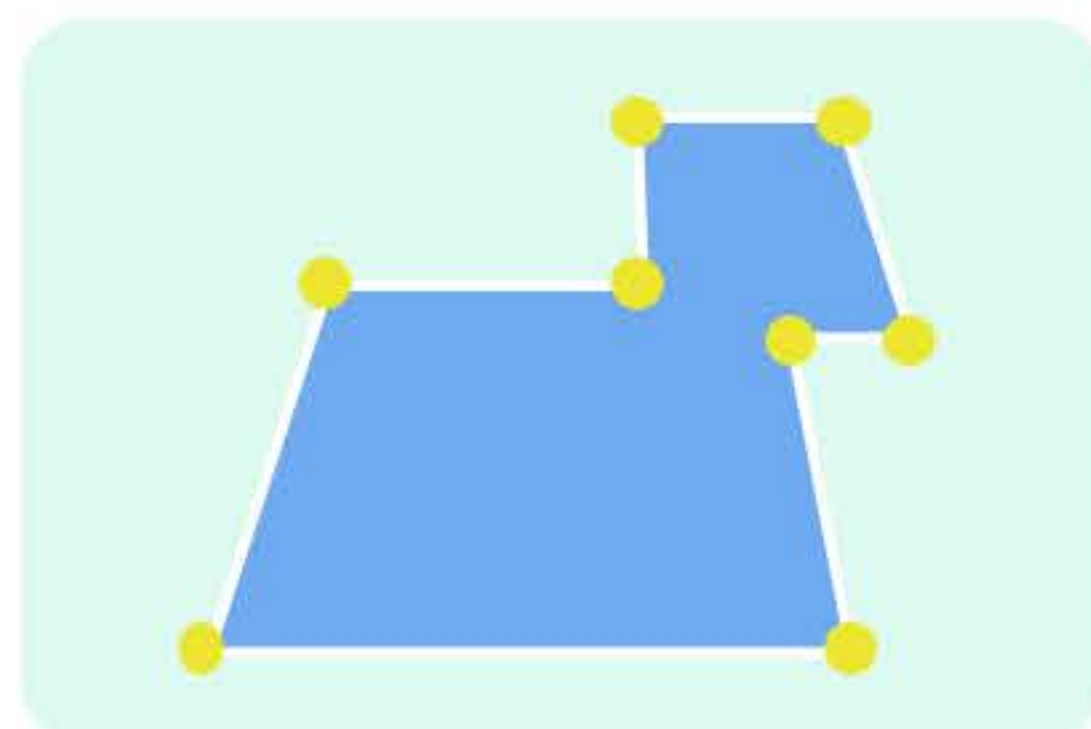
平行直線・外周算出

平行直線やポイントをAR空間に表示し、ガイドとして現実空間に固定。



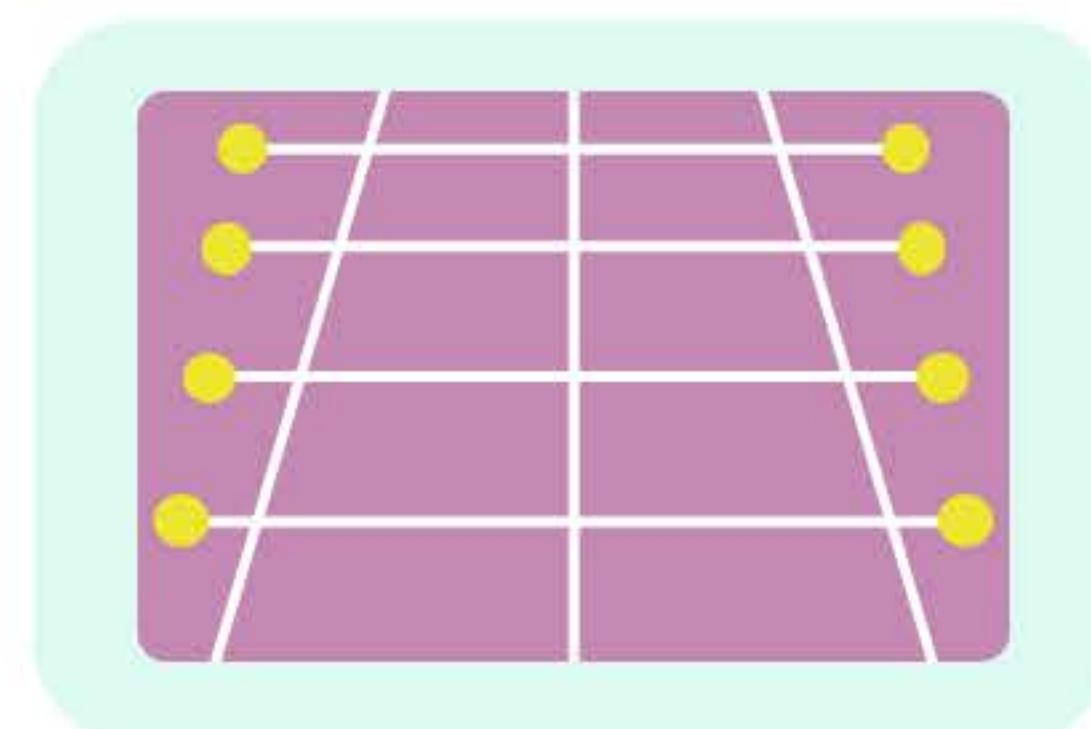
畝・苗 シミュレーション

仮定の畝やビニールマルチを現実空間上に表示。畝幅、畝間、株数などの自動計算も可能。



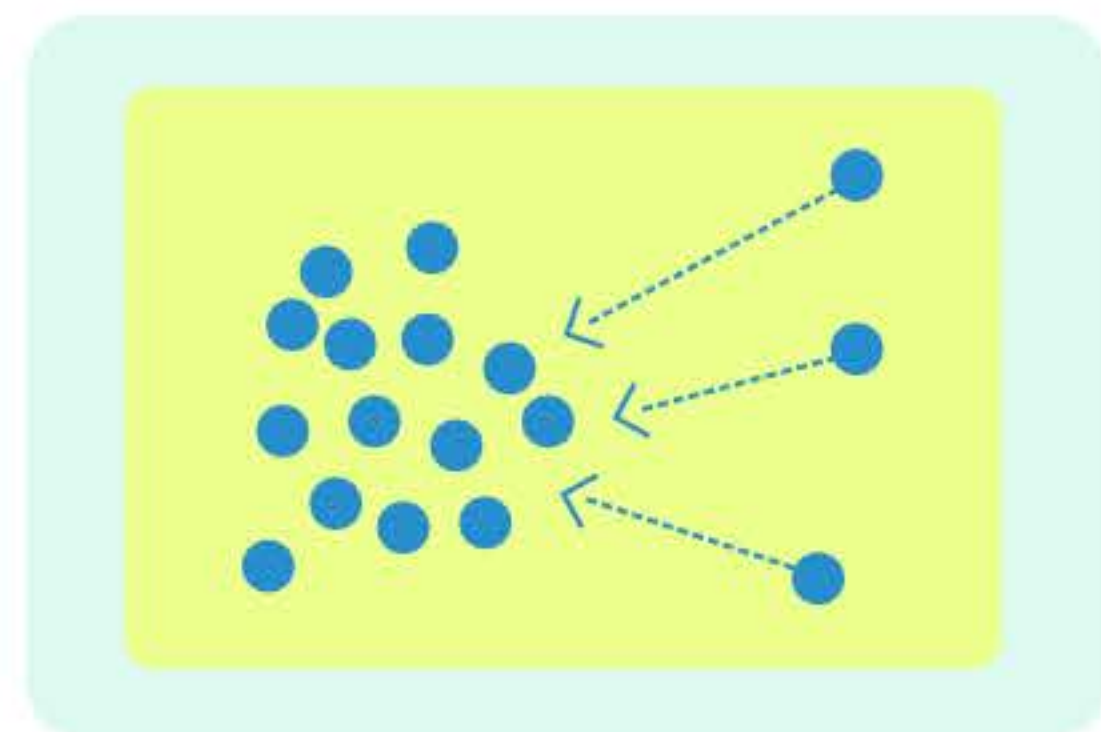
面積計測

計測対象の外周を一周するだけで面積を計測。任意の等分割線をAR空間上に表示。



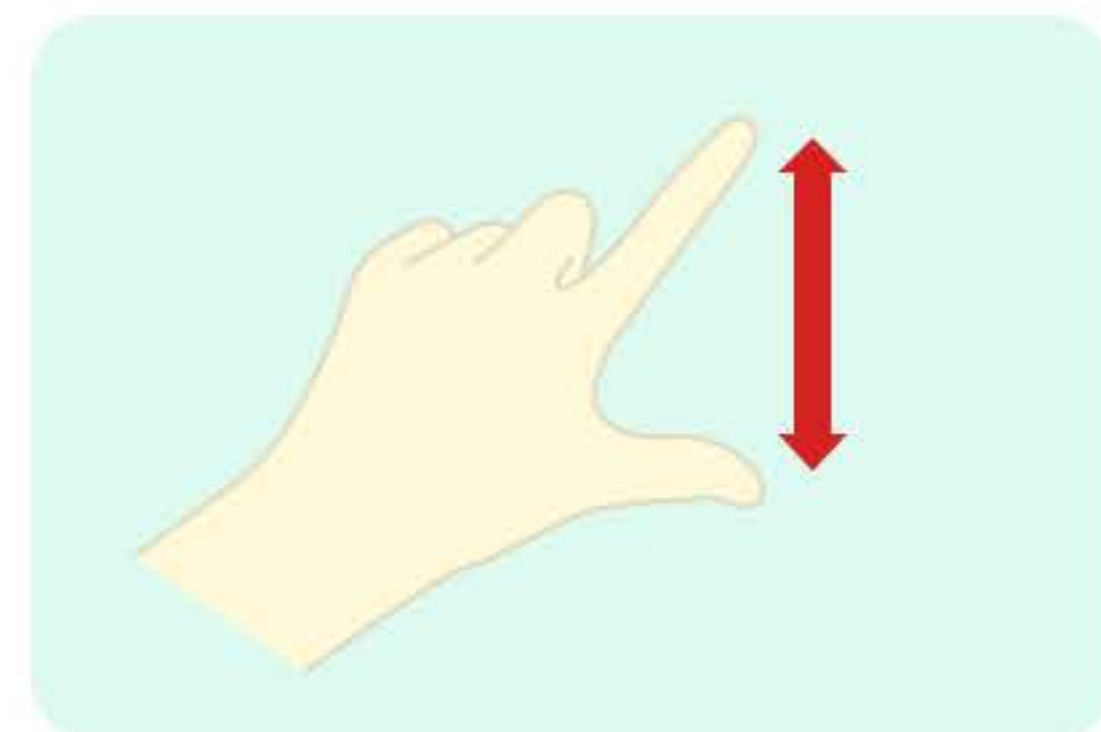
距離計測

2点間の距離を計測し、等分割線をAR空間上に表示。連続して複数行うことも可能。



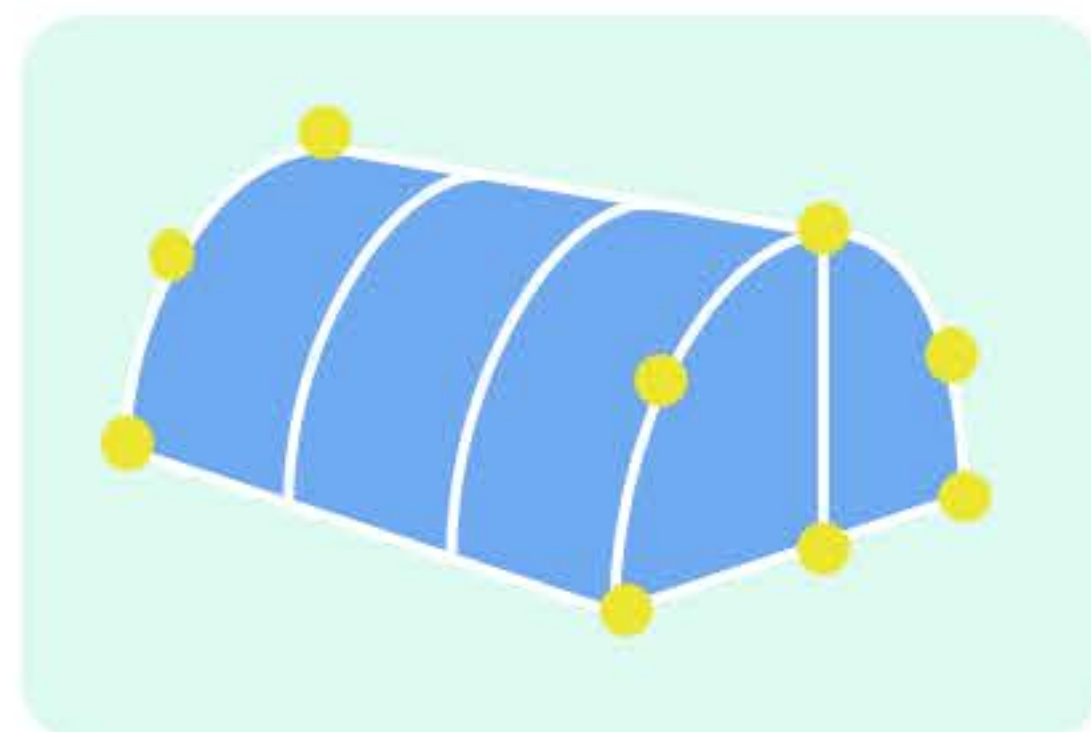
レベル計測

現実空間を3Dスキャンし、ARのビー玉を配置。凹凸、勾配、水平高さが確認できる。



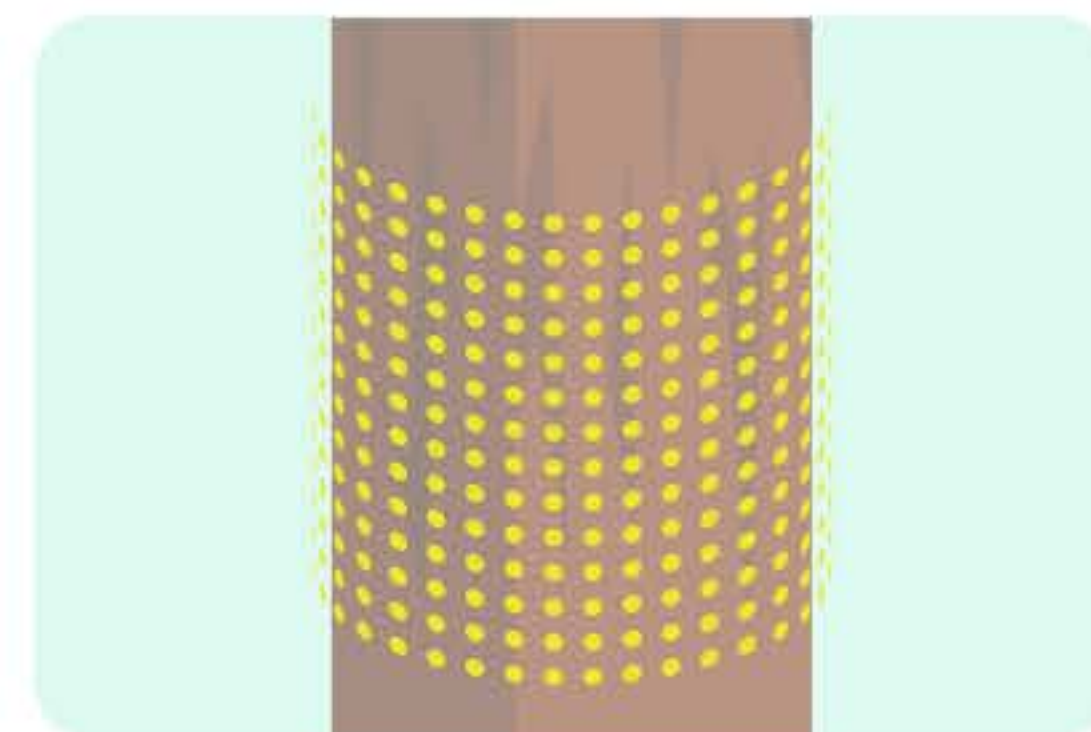
サイズ計測

画面をタップしたり、指先を対象に当てたりするだけでサイズを計測。判定や記録も簡単。



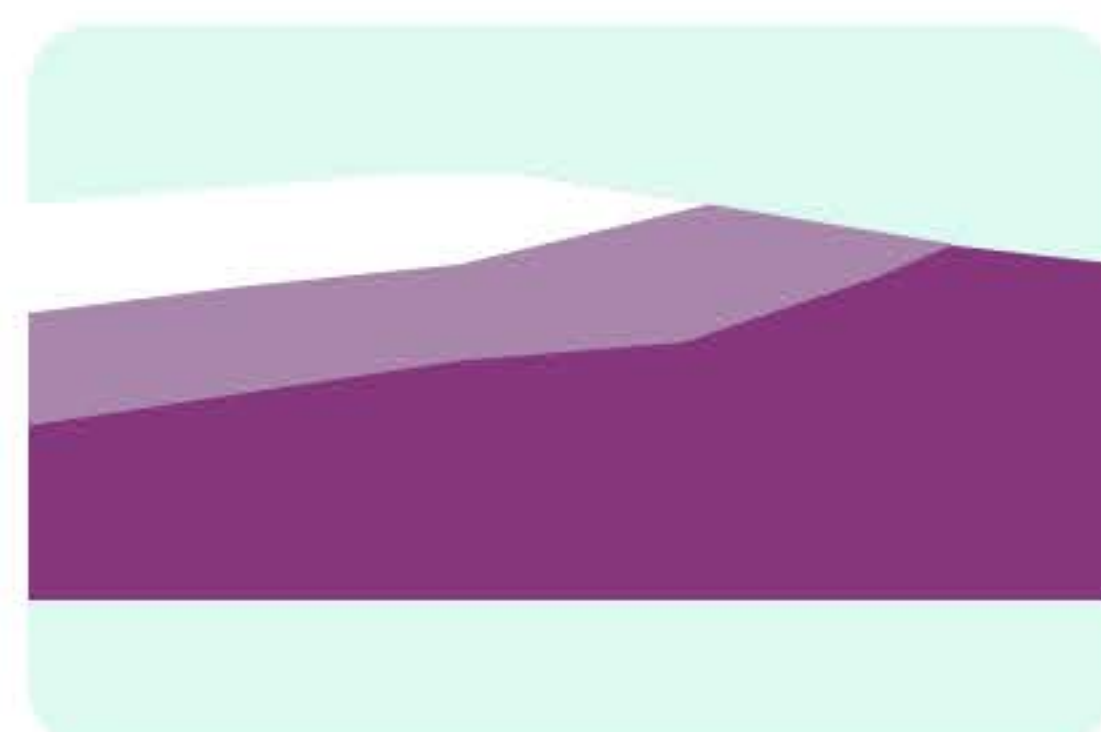
体積計測

凹凸のある3Dの物体や空間をポイントで囲うだけで、体積の概算を算出。



林業用調査

幹の太さを測る「周囲計測」、中心から一定範囲内の樹木を数える「標準値調査」の技術も。



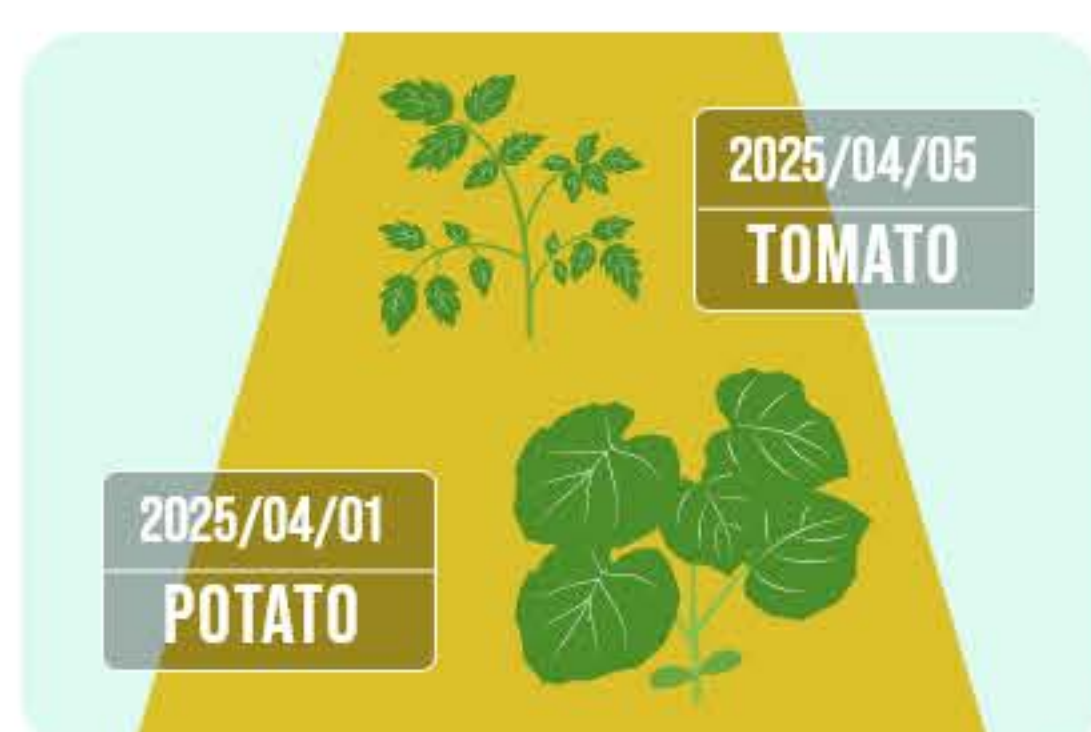
外部サービス連携

外部サービスで登録した可変施肥マップを現実空間に配置し、可視化。



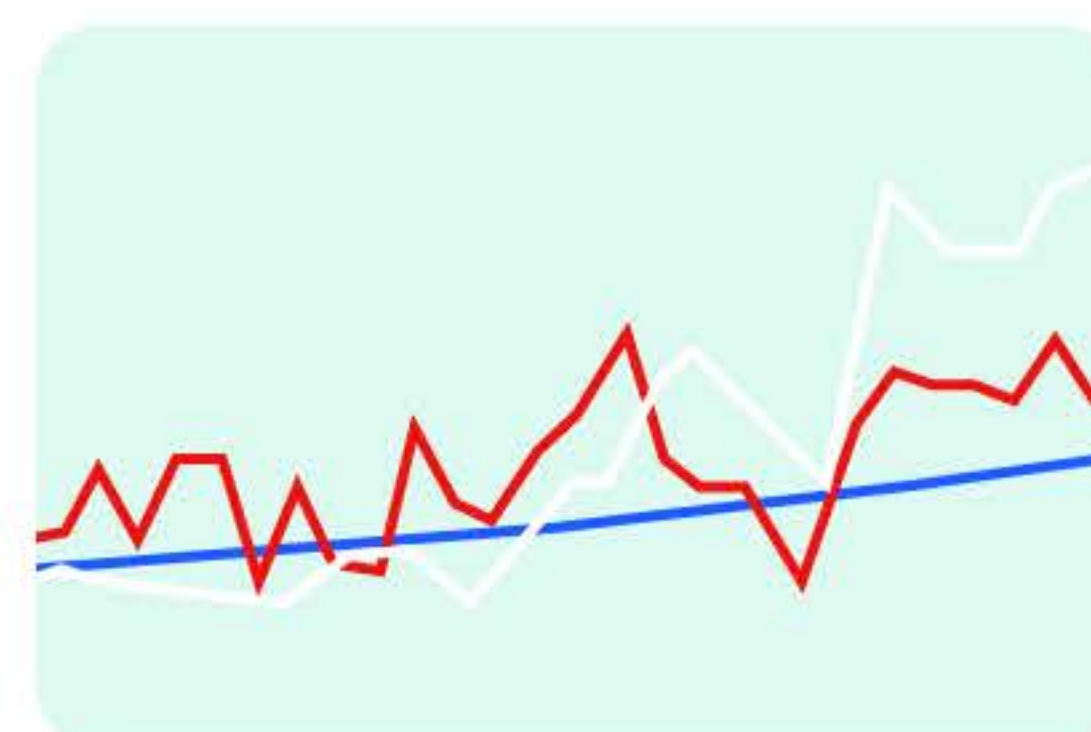
AI果実熟度判定

徳島県立農林水産総合技術センターが開発した機能を搭載。柿と梅の熟度を自動判定。



空間マッピング

現実空間にテキストや画像、チェックボックスを配置し、保存。データは何度でも再現できる。



気象積算シミュレータ

全国500箇所以上、過去40年分の気象庁観測データの検索とシミュレーションを提供。



なぜ農業に 注目したのですか？

大学在学中に北海道で酪農を、会社を退社後に茨城県で和牛・稲作・ハウス苺を経験しました。単純に土や動物と触れ合い、作業をすることが好きですし、同じ作物でも毎年何かが違う点も魅力的ですね。



このアプリを開発した きっかけは？

スマート農業ツールは、大規模農業において収益向上などの効果を発揮するものが多いのですが、日本の農地のほとんどは中小規模。そこに向けて、安価に使用でき、初心者でもひとりで作業ができる農作業補助アプリ「Agri-AR」を開発しました。販売農家はもちろん、家庭菜園でも活用できます。



今後はどのような 開発を？

「体験」に着目した、MR（複合現実）農業体験アプリも開発しています。スマートグラスを用い、現実空間で、自分の手で収穫や農作業ができます。介護施設などでも喜ばれている新しい農業体験の形です。



先進制御システムで 自動化とIoT化を支援

センサーと通信機能により、インターネット経由で情報を収集するIoTを駆使した
制御技術を用いて、農業の自動化を実現。
灌水の自動化や、作物を自動で収穫するロボットの開発が進んでいます。



いな かず
アイナックシステム 代表 稲員重典さん

2008年に半導体製造装置における制御システムの開発を主体とする会社を創業。2012年に農業自動化システムの開発を始め、かん水システムを提供。2024年にはいちご自動収穫ロボットを販売開始。

アイナックシステムのサービス

かん水コントローラー



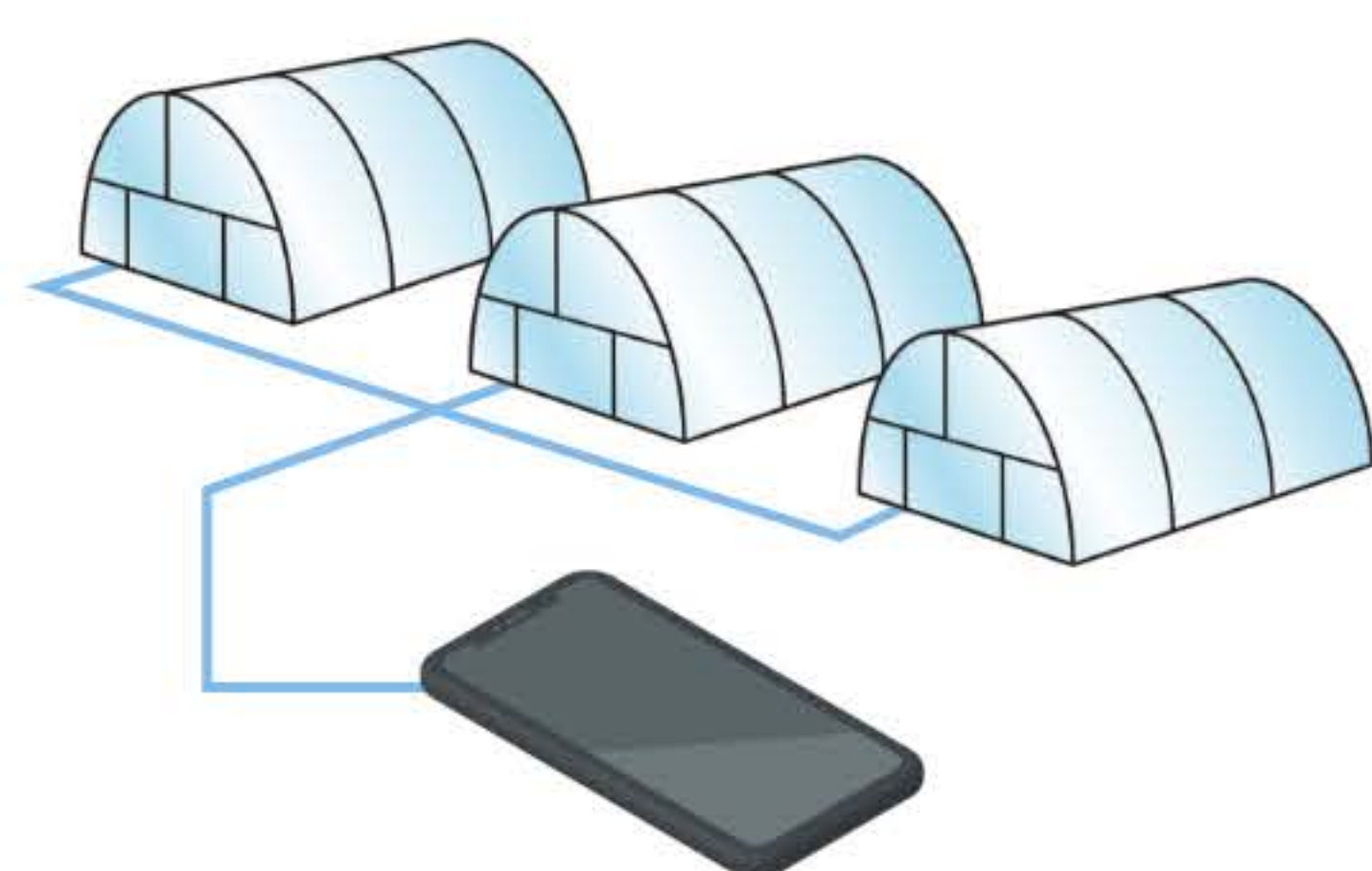
開始時間や間隔、回数、曜日ごとの設定などを細かく管理しながら灌水を自動化。液肥も混入可能で、スマホなどで遠隔操作可能。

局所土壌ヒーターシステム



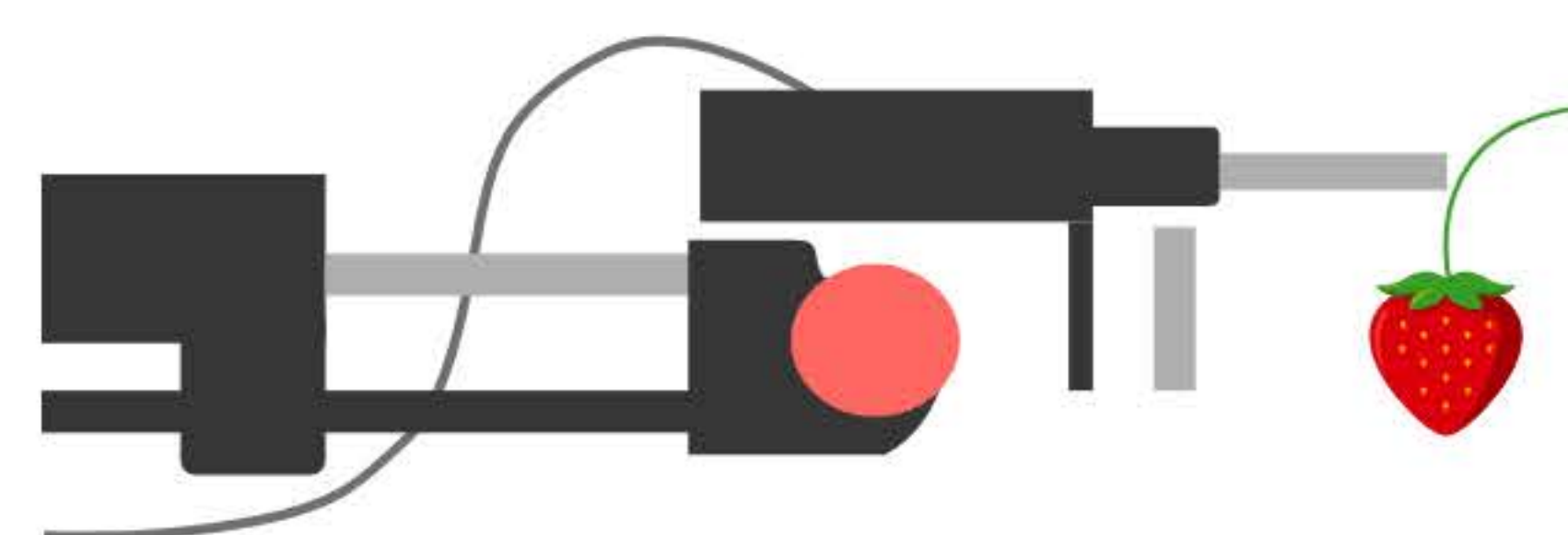
ブロックごとに土壌を直接温め、重油使用量を約半分、収穫量を2倍以上に。30アンペアの契約電力で基本電気料金も抑制します。

大規模農場かん水システム 「AguRo-W」



統括コントローラー1台で、最大10ブロックの農場の自動かん水を、スマートフォンやタブレット、パソコンから遠隔管理できるシステム。大規模農場経営に適しています。

いちご自動収穫ロボット 「ロボつみ®」



AIで色を判定し、収穫に適したいちごを見つけてそっと優しく収穫する、自走式の自動収穫ロボット。少人数でも一斉収穫が可能になります。



傷つきやすい実をやさしく収穫

独自に開発し特許を取得した収穫ハンドでやさしく収穫。ロボットは地面に張ったロープに沿って自走し、栽培棚の間を自動で移動します。万願寺とうがらしなどの別の野菜への転用も開発が進められています。

農家を重労働から解放する開発

農家で育ち、その重労働を間近に見てきた代表の稲員さん。自動制御システムといちご自動収穫ロボット「ロボつみ®」の開発は、農家の人々を重労働から解放したいという稲員さんの思いが込められています。



まだまだあります！

スマート農業を支える技術

労働力不足は、農業にとって大きな課題。この課題を解決するため、ほかにもさまざまな開発が進められ、実証実験が行われています。その一部をご紹介します。

現場全員でデータを共有



(株) エゾウインの「レボサク」は端末を車両の電源に挿すだけで高精度・リアルタイムに車両の軌跡を可視化。誰でもいつでも全体の進捗が把握可能に。農作業にもっと集中できる環境を提供。

適所適量散布ドローン



ひとりでも簡単に操作できる(株) ナイルワークスのフルオートドローン「Nile-JZ Plus」。作物の生育状態にあわせて、必要なところだけに適量の農薬・肥料を散布する可変散布が可能です。

水田の雑草の発生を抑える



(株) NEW GREENが開発し、井関農機(株)が販売する「アイガモロボ」は水田の泥をかき混ぜて日光を遮断し、雑草の成長を抑制。ソーラーパネルと蓄電池を搭載し、太陽光のみで稼働します。

自律走行型農薬散布ロボット



(株) レグミンが開発した自律走行型の「農薬散布ロボット」。GPSやセンシングを活用して畝を認識して自律走行し、作物に接触せずに農薬や液肥等を所定の位置・量で自動的に散布します。

スマート農業向け品種の

開発が進んでいます



農研機構が約30年の育成期間をかけて開発したりんご「紅つるぎ」。樹形がコンパクトなので、1列に並べて植樹し、結実面を壁状に仕立てることで、将来的には自動収穫機などによる収穫機械化の可能性も。他にもさまざまな、スマート農業に適した品種が開発されています。

今週のまとめ

中小規模向けから大規模向けまで、さまざまなスマート農業技術が開発中。

ロボットと一緒に作業する未来の農業も実現間近に。

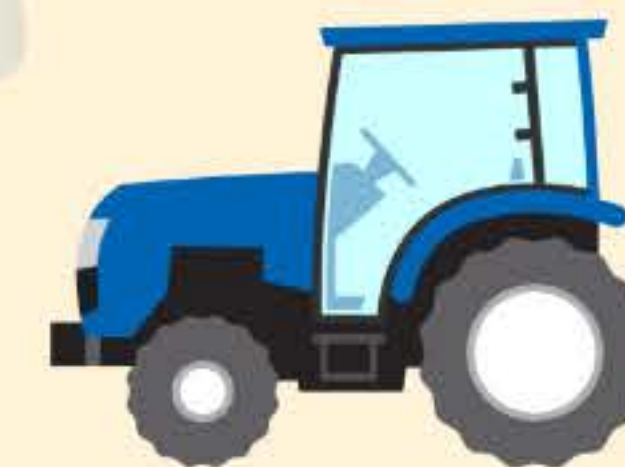
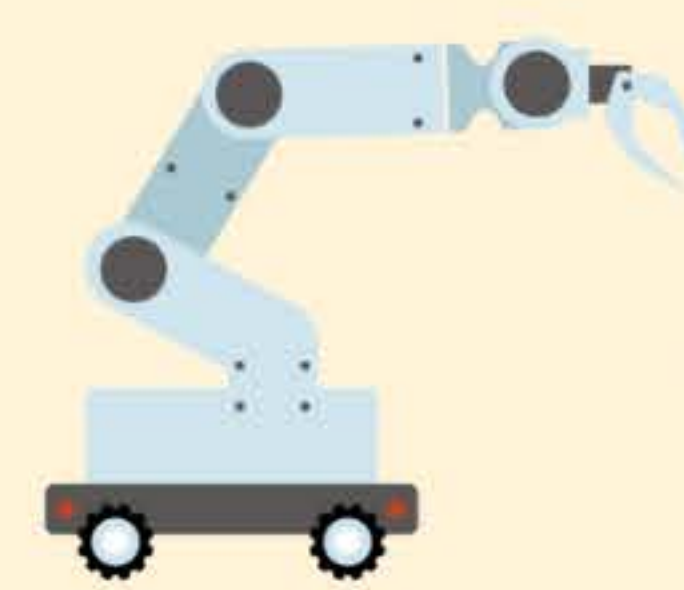
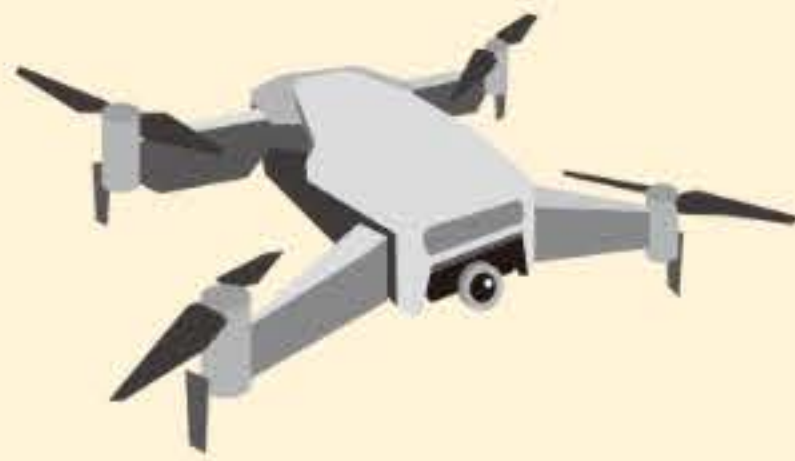
スマート農業に適した作物の品種開発も盛んに行われています。



特集

スマート農業

4



スマート農業でも 女性が活躍中

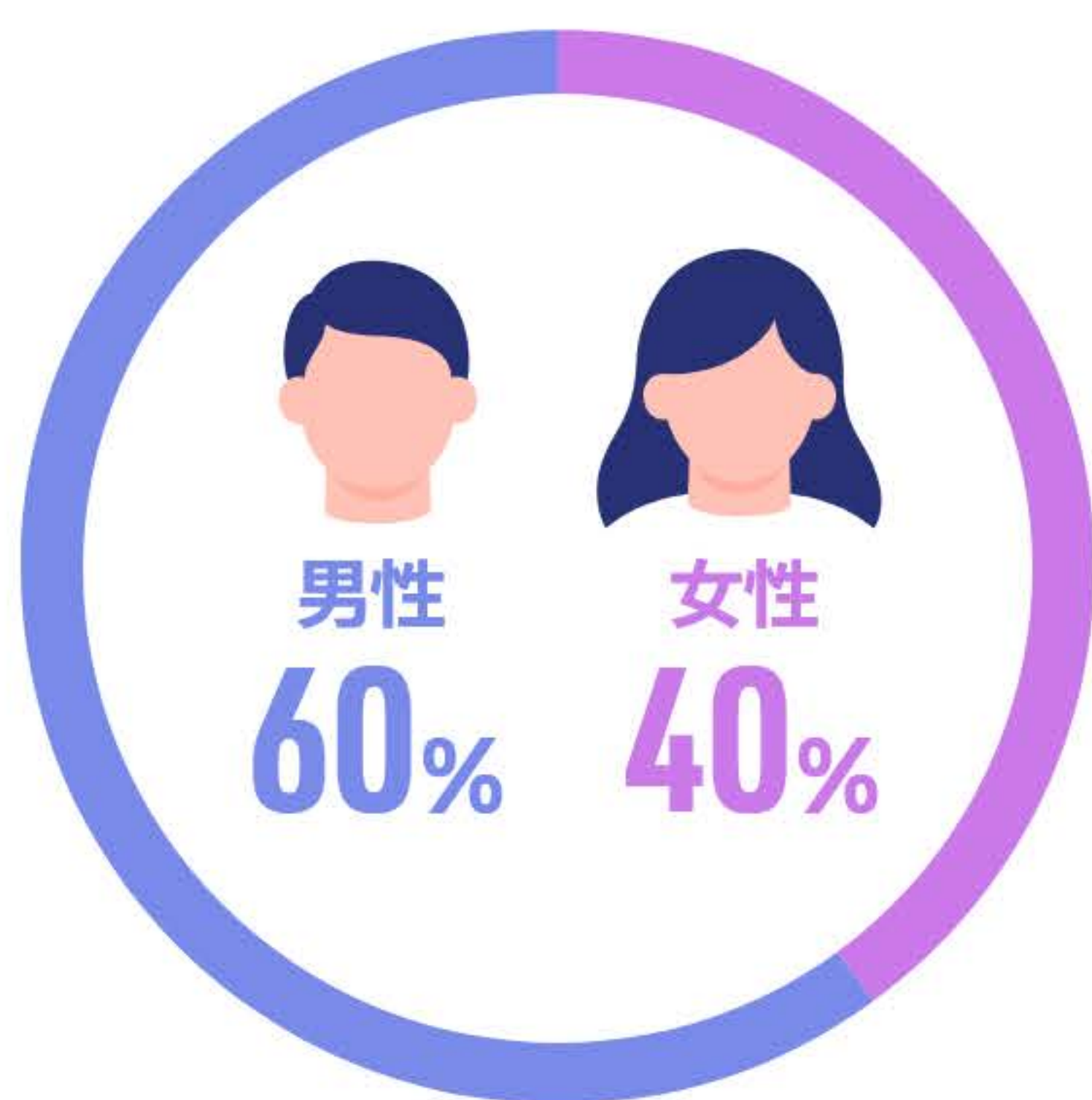


収穫物や農薬などの重いものの運搬やトラクター運転などの負担が減り、
作業時間の短縮によって自分の時間や家族で過ごす時間が増える
スマート農業は、女性農業者にとっても、心強い味方です。

女性農業者を 取り巻く環境

今後、スマート農業の導入が進むことで、女性農業者のますますの増加も期待できます。

基幹的農業従事者の
約4割を女性が占めています



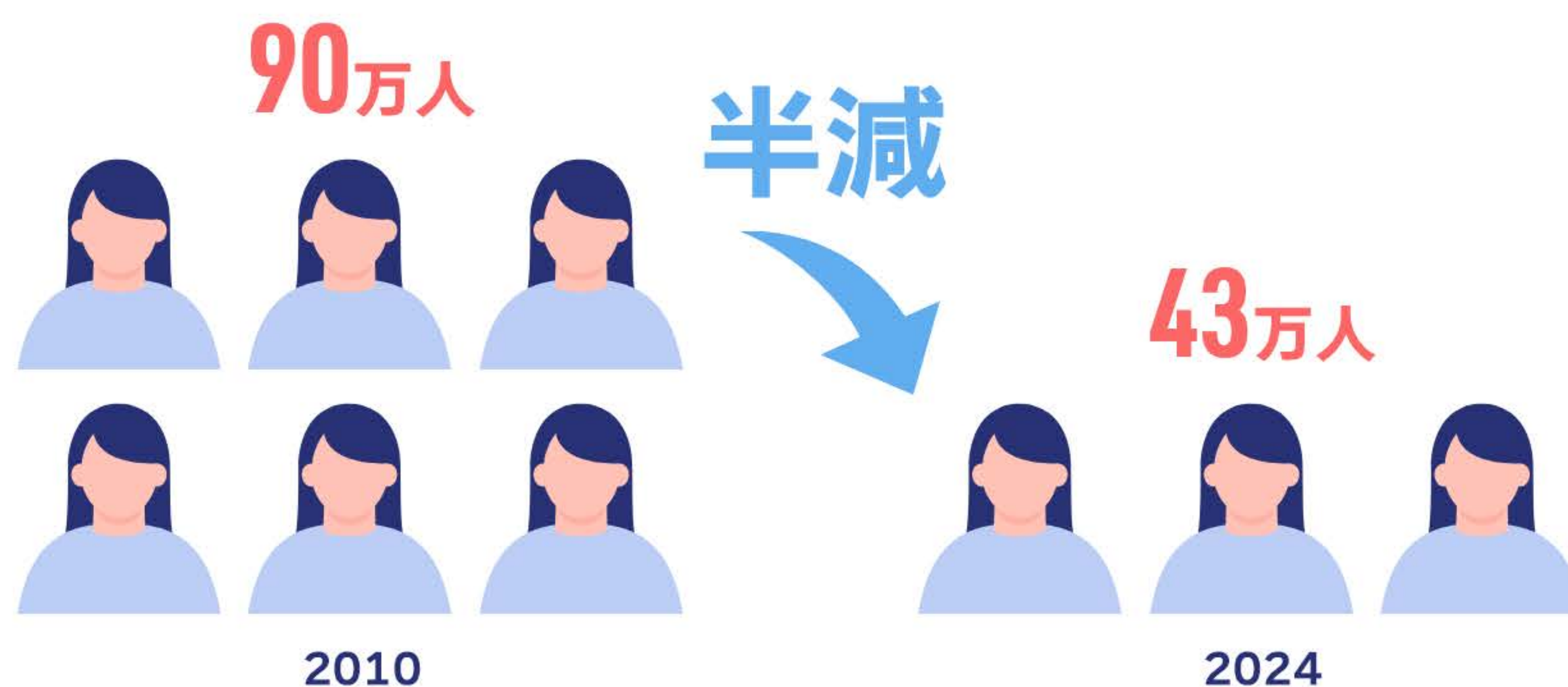
2023年は、1年間で
12,680人の女性が
新規就農しました。

2023



12,680人新規就農

2010年に比べて、女性の基幹的農業従事者数は
2024年に半減しています。



※「基幹的農業従事者」とは、15歳以上の世帯員のうち、ふだん仕事として主に自営農業に従事している者をいう



農業女子プロジェクト

農業で活躍する女性の姿を広く知っていただくための取り組み。女性農業者が日々の生活や仕事、自然との関わりの中で培った知恵を、さまざまな企業の技術やノウハウ、アイデアなどと結びつけ、新たな商品やサービス、情報を発信しています。

スマート農業に取り組む

女性たちの

リアルな日常



山形県の米農家「おしの農場」の4代目、押野日菜子さん、寧々さん姉妹。

スマート農業技術活用促進法の計画認定を受け、

ドローンと自動操舵トラクターを駆使したスマート農業の取り組みを進めています。



おしの農場 押野日菜子さん(右)、寧々さん(左)

長女の日菜子さんは、自分のやりたい職業を探すなかで「やっぱり農業が面白そう」と思い、次女の寧々さんは小学生の時から心に決めて、ともに山形県立農林大学校（現・東北農林専門職大学附属農林大学校）に進学。卒業後、家業の「おしの農場」を継ぐことに。

巨大なトラクターは 自動操舵で楽々！

真っ直ぐに運転するには技術が必要ですが、自動操舵機能でほぼフリーハンドに。作業負担が軽減され、安全に短い休憩時間を楽しむことができます。



重たい農薬散布は ドローンが解決

30キログラム近いタンクを背負い、人力で行っていた農薬散布はドローンで。「ドローンがなければ私たちではできない作業です」と日菜子さん。



スマホ+GPSで 作業する場所を把握

点在する田畑の位置情報と作業の進捗状況をスマホで確認できるシステムで、人員配置が簡単に。働く人にとって、どこで何をするのかが一目瞭然。



ブランディングや SNSでの情報発信も

パッケージやロゴは知り合いのデザイナーさん作。「ロゴがあると気分が上がります」と寧々さん。直売情報や生育状況などをInstagramで発信中。



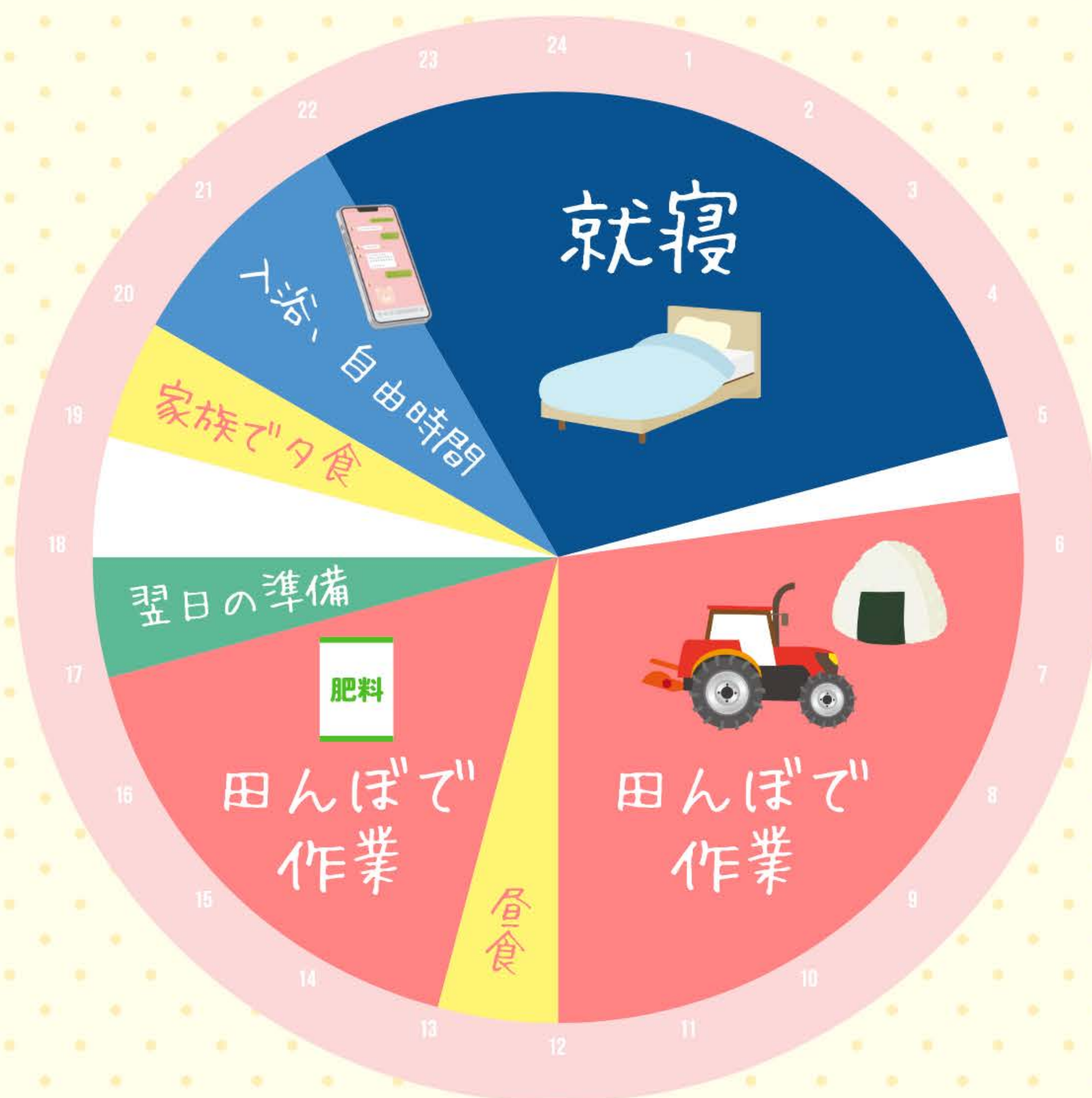
／スマート農業技術を導入した／

押野姉妹のとある1日

田植え前



田んぼの代（しろ）かき（田んぼをならす作業）時期は、繁忙期。朝食は、トラクター自動操舵中におむすびを頬張ります。



田植え後



田植え後のドローンでの農業散布は、風があまり吹かない早朝に。午後の自由時間には美容院やネイルサロンに行ったりすることも。



私たちが思う

スマート農業のいいところ

01 力を使う作業が減った

重いタンクを背負う農薬散布はドローンが担当、収穫物の運搬はアシストスーツがサポートするなど、スマート化によって、農作業にかかる負荷が軽減されています。



02 作業の見える化が実現

収集したデータをもとに施肥量をコントロールしたり、これまで経験や勘に頼っていた作業にも取り組めるようになります。

03 若手従業員が楽しいと言ってくれる

最先端技術に触れるスマート農業は、若い就農者の仕事への興味や楽しみを増す要因にも。作業時間短縮によるプライベートの充実も、もちろん大歓迎。



04 家族一緒に食卓を囲める

作業の効率化や効率的な人員配置、生育予測などにより、より計画的に日々の暮らしを営めるように。家族一緒に食卓を囲む豊かな暮らしが実現します。

今週のまとめ

重いものを楽に持ち上げられるアシストスーツなど、

女性をサポートする技術の開発が進んでいます。作業の見える化により、

農作業経験が少ない人でも取り組みやすいのもポイントです。



「社員食堂」 行ってみたい!



EVOLVING EMPLOYEE CAFETERIA

vol. 06

お食事処 はな＊花

株式会社ティスコ運輸／山形県山形市

一般利用できて、こだわりのメニューが評判の社員食堂（職員食堂）を訪ねる連載企画。

第6回は、社員の福利厚生だけでなく、地域貢献やSDGs達成の場にもなっている

（株）ティスコ運輸の「お食事処 はな＊花」を紹介します。

オープン以来、“一般利用大歓迎”を貫き 今では地域に親しまれる食堂に



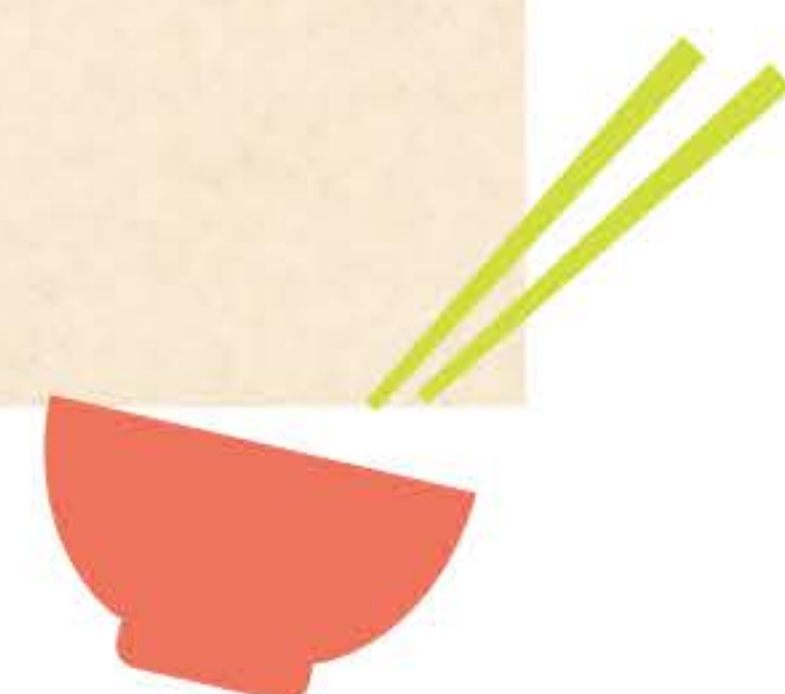
総合物流事業を中心に展開する山形市の（株）ティスコ運輸。本社ビル2階にある「お食事処 はな＊花」は、社員食堂でありながら、社員だけでなく近隣住民や近隣企業で働く人々も多数訪れるランチスポットになっています。同社は経営理念の一つである地域貢献を社員食堂でも体現しようと、オープンした2019年以来、“一般利用大歓迎”を謳い、誰もが気軽に食事できる場を提供してきました。一番人気のメニューは「日替わりランチ」。体力勝負のトラックドライバーを擁する企業らしく、主菜のボリュームがかなりあるのが特徴です。社員だけでなく一般利用客もごはんのお替わり自由というのが、また喜ばれている理由とか。日々替わる主菜は、社の公式サイトやInstagramで確認することが可能です。厨房で一から丁寧に手作りされる料理を楽しみにしている利用客が多いといいます。



（上）朝早くから仕込みと調理に大忙しの厨房スタッフ。
（下）社員も一般利用客も並んで料理を受け取ります。



「社員食堂や会議室の一般開放を通して地域の賑わいに貢献したい」と話す（株）ティスコ運輸の菅原茂秋社長。新型コロナウイルス感染症の影響で地元の小学校や中学校が臨時休校になった際は、社員食堂で児童生徒たちに100円ランチを提供したそうです。

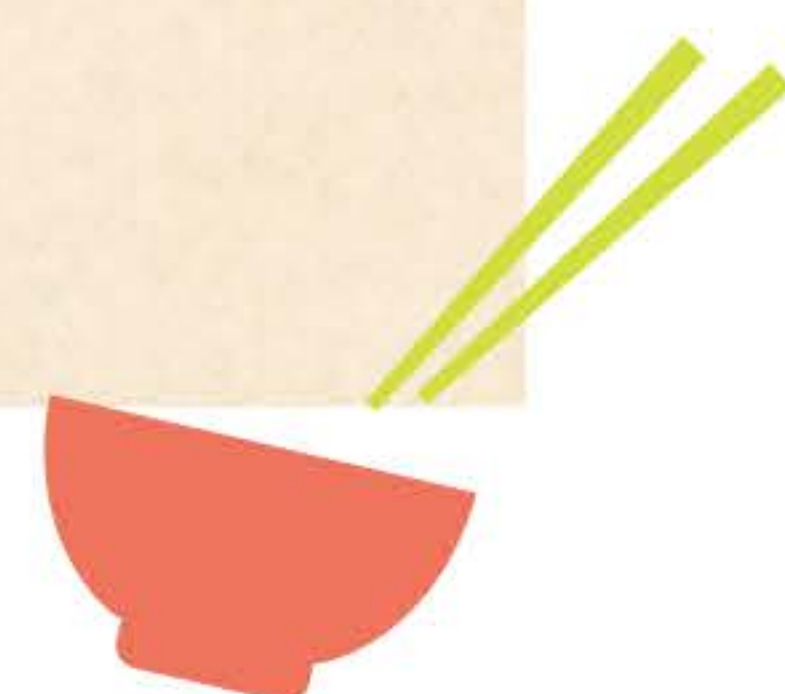


Pick Up Menu!

日替わりランチ チキンカツ



この日の主菜は、サクサクの衣をまとったジューシーでやわらかなチキンカツ。お替わり自由のごはんは、山形のブランド米「つや姫」を炊いたもの。抜群の甘味と旨味があります。（550円／税込）



スマート農業を推進するグループ農場と連携。 “食の循環”でSDGs達成に取り組む



メニュー価格が手頃なもの「お食事処 はな＊花」の魅力です。低価格の実現にはグループ農場であるティスコファームが大きく関わっています。山形県東根市にある同農場は、ドローンを活用した種まきや施肥など、先進的なスマート農業で米や野菜、果物を生産しています。こちらの農作物を自社のトラックで運び、使用することでコスト削減を図っているわけです。形が悪いという理由で廃棄されていた野菜や果物を食堂で積極的に使うことは、食品ロス削減にもつながります。1日45リットルほど発生する食堂の食品残さは、生ごみ処理機で堆肥化しティスコファームへ。こうして“食の循環”を生み出し、SDGs達成に取り組んでいます。



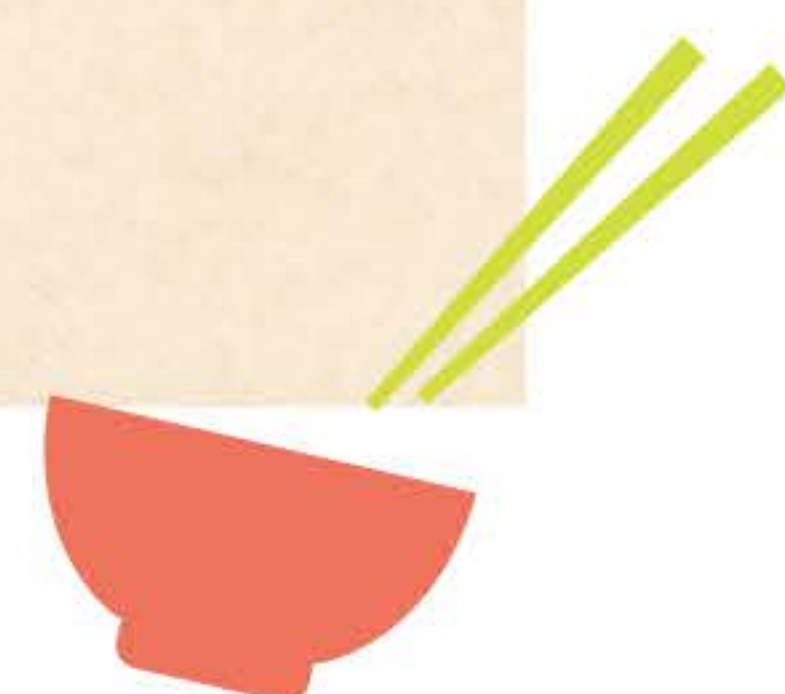
（左）ティスコファームの野菜を使った「日替わりランチ」の主菜、豚肉とナスの甘辛みそ炒め。
（右）新鮮な直送野菜を食堂で販売すると、あっという間に売り切れます。



食堂で使用する米「つや姫」と「はえぬき」
はすべてティスコファーム産。



本社敷地内に設置した生ごみ処理機で食品残さを堆肥化。



山形名物の麺や健康に配慮した定食も。 多彩なメニューを提供中



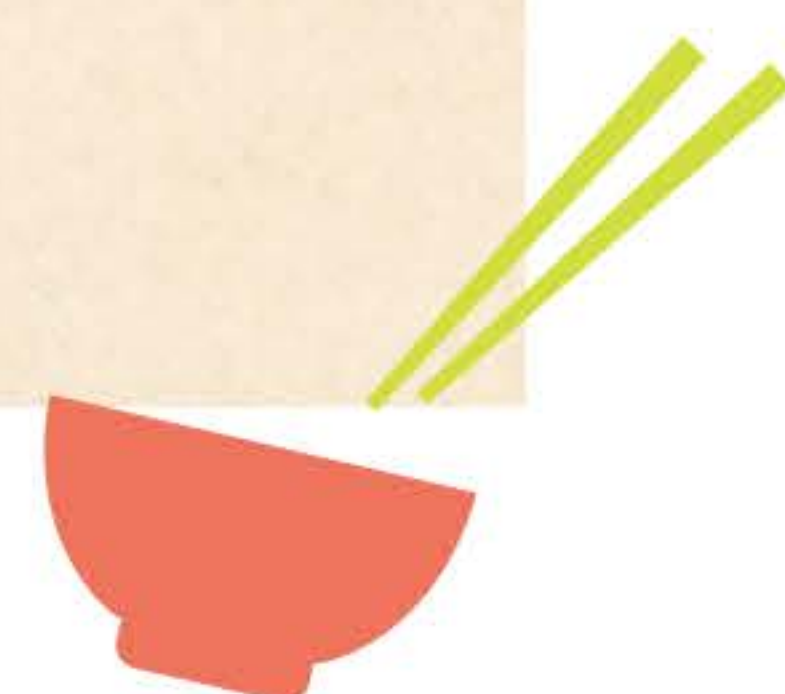
麺メニューのおすすめは、山形名物の「肉そば」（550円／税込）。発祥の地・河北町にある名店のレシピを再現した、雑味のないスープが自慢です。親鶏を低温でじっくり煮出して、旨味を最大限に引き出しています。コリコリと歯応えのある親鶏とコシのあるそばの取り合わせは絶妙です。もう一つのおすすめは、やはり山形名物の「辛味噌ラーメン」（650円／税込）。数種類の味噌をブレンドし、一味唐辛子などを加えて1週間ほど寝かせるオリジナルの辛味噌づくりには、並々ならぬこだわりがあるそうです。一方、前日に食べ過ぎたので今日は軽めの食事をしたいという人に選んでほしいのは「健康ランチ」（390円／税込）。あえてヘビーな主菜を省いた定食が、もたれた胃をリセットしてくれます。社員の健康に配慮する健康経営の取り組みの一つとして誕生した定食です。



山形の「辛味噌ラーメン」は辛味噌をトッピングするのが一般的ですが、こちらではスープにあらかじめ調合しています。もっと辛くしたい場合は、辛味噌の追加も可能。



ごはん、味噌汁、海苔、納豆または生卵、日替わり小鉢の「健康ランチ」。健康診断の数値が気になる社員にも好評とか。



／ 今回訪れたのは… ／

お食事処 はな＊花



所在地 山形県山形市大字漆山字大段
1865番地5 TISビル2F



電話 023-686-9860



営業時間 11時30分～14時00分
定休日 日曜日、祝日（土曜日不定休）

公式サイト



aff特集一覧はこちら



行ってみたい「社員食堂」連載一覧はこちら

